

燕沢遺跡第 14 次調査

—国道 4 号仙台バイパス拡幅工事に伴う発掘調査報告書—

2016 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

国土交通省東北地方整備局

燕沢遺跡第 14 次調査

—国道 4 号仙台バイパス拡幅工事に伴う発掘調査報告書—

2016 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

国土交通省東北地方整備局

序 文

仙台市の文化財保護行政につきまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

市内には、旧石器時代から近世に至るまで数多くの埋蔵文化財が遺されています。当市教育委員会といたしましても、先人たちの残した貴重な文化財を保護し、保存・活用を図りながら、次の世代に引き継いでいくことは、これからの大いに欠かせない大切なことと考えております。

本報告書は、国道4号仙台バイパス拡幅工事に伴う本発掘調査の成果をまとめたものです。仙台バイパスは交通量が非常に多く、工事の計画地内付近では交通渋滞が発生していました。渋滞緩和のために拡幅工事が計画され、その工事計画地に燕沢遺跡が含まれていたため、本発掘調査を実施することになりました。

燕沢遺跡は、これまで13次にわたる調査が実施されており、古代の僧坊跡と考えられる掘立柱建物跡等が確認され、その建物に葺いていたと推測される瓦や漆紙文書などが発見されていることから、古代の重要施設があったと推定される遺跡です。調査の結果、古代の竪穴住居跡と溝跡、縄文時代前期の竪穴住居跡が確認されました。本報告書が学術研究はもとより、市民の皆様に広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに調査報告書の刊行にあたり、事業者である国土交通省東北地方整備局をはじめ、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

平成28年3月

仙台市教育委員会
教育長 大越 裕光

例　言

1. 本書は国道4号仙台バイパス拡幅工事に伴い、仙台市教育委員会が実施した本発掘調査の成果についてまとめたものである。
2. 本書の執筆・編集は、庄子裕美が担当した。
3. 本発掘調査の実施ならびに報告書作成に際し、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所より協力を得た。
4. 発掘調査および資料の整理に際して、次の方々と関係機関から多くのご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(五十音順・敬称略)
石橋宏、菅野智則、柴田恵子、芳賀文絵、東北歴史博物館
5. 調査・整理に関するすべての資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1:50,000地形図「仙台」の一部を変更・縮小して使用している。
2. 遺構図の座標値は「世界測地系」を基準とし、記載している。図中の方位北は座標北を基準とした。
3. 本書に使用した標高値は海拔高度(T.P.)を示す。
4. 本文及び土層注記表に記載している土色は、「新版 標準土色帖」(小山・竹原 2010)に基づいて設定した。
5. 檢出遺構については以下の遺構記号を使用し、遺構別に番号を付した。
S I : 竪穴住居跡 S D : 溝跡 S K : 土坑 P : 柱穴、ピット
6. 出土遺物の登録には以下の遺物記号を使用し、種別毎に番号を付した。
A : 縄文土器 B : 弥生土器 D : ロクロ土師器・赤焼土器 E : 須恵器
F : 丸瓦 G : 平瓦 K : 石器 N : 金属製品
7. 遺物実測図の縮尺はスケールを全ての図中に付した。
8. 遺構図と遺物実測図に使用したスクリーントーンは、凡例を図中に示した。
9. 遺物観察表の()内の数字は復元值を、「—」表記は計測不能を示している。
10. 本文中の石器の記述については、石器の遺物実測図の左側を「表面」、右側を「裏面」とした。
11. 遺物写真には遺物の登録番号と写真的略縮尺を記載した。

目　次

序 文	
例言・凡例	
目 次	
第1章 燕沢遺跡と調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1
第3節 遺跡の地理的環境と歴史的環境	1
第4節 調査の方法と経緯	4
第2章 基本層序	5
第3章 檢出遺構と出土遺物	10
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 溝跡	15
(3) 土坑	16
(4) ピット	23
(5) 遺構外出土遺物	24
第4章 まとめ	27
第1節 縄文時代	27
第2節 古代	28

第1章 燕沢遺跡と調査の概要

第1節 調査に至る経緯

燕沢遺跡第14次発掘調査は、平成27年度に仙台市宮城野区燕沢東三丁目地内で計画された国道4号仙台バイパス拡幅工事に伴う埋蔵文化財の本発掘調査である。

燕沢遺跡内で国道4号の6車線化に伴う拡幅工事が計画されたことから、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所より、平成26年4月21日付、国東整仙二調第3号「一般国道4号仙台拡幅事業計画と埋蔵文化財のかかわりについて（協議）」（平成26年5月19日付、教生文第109-7号により県通知を伝達）が仙台市教育委員会に提出された。これを受け、協議の結果、工事計画地内では本発掘調査が必要とされ、仙台河川国道事務所から提出された、平成26年6月27日付、国東整仙二調第7号「埋蔵文化財発掘の通知について」（平成26年7月22日付、教生文第107-13号により県通知を伝達）に基づき、平成27年9月1日より本発掘調査を実施した。

第2節 調査要項

遺跡名	燕沢遺跡（宮城県遺跡登録番号 01001）
所在地	仙台市宮城野区燕沢東三丁目地内
調査原因	国道4号仙台バイパス拡幅工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査調整係 主事 庄子裕美 文化財教諭 笹原 悅
調査期間	平成27年9月1日～平成27年11月30日
調査対象面積	774.5m ²
調査面積	540m ²
整理期間	平成27年12月1日～平成28年3月28日

第3節 遺跡の地理的環境と歴史的環境

1. 地理的環境

燕沢遺跡は仙台市の北東部のJR東仙台駅の北東約2kmに位置する。仙台市域の地形は、西から東にかけて山地・丘陵地・低地に大別される。丘陵地には奥羽山脈から東に分岐する富谷・七北田丘陵があり、その東端は台原・小田原丘陵と呼ばれている。燕沢遺跡は台原・小田原丘陵の最東端の段丘上にあり、標高は20～30mで、周辺の沖積平野と比べると15～20m高い。



第1図 燕沢遺跡の位置図



※国土地理院発行 平成14年「仙台」1:50,000を一部変更

遺跡名	種別	時代
燕沢古墳	古墳	古墳・弥生・古墳・奈良・平安
仙台今城六郎	古墳	古墳
仙台今城五郎	古墳	古墳
仙台今城四郎	古墳	古墳
仙台今城三郎	古墳	古墳
仙台今城二郎	古墳	古墳
仙台今城一郎	古墳	古墳
仙台今城	古墳	古墳
仙台今城前	古墳	古墳
仙台今城後	古墳	古墳
仙台今城左	古墳	古墳
仙台今城右	古墳	古墳
仙台今城東	古墳	古墳
仙台今城西	古墳	古墳
仙台今城北	古墳	古墳
仙台今城南	古墳	古墳

遺跡名	種別	時代
1 燕沢古墳群	古墳	古墳・奈良
2 大塚寺古墳	古墳	古墳・奈良
3 福井古墳	古墳	古墳
4 仙台今城	古墳	古墳・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
5 仙台今城前	古墳	古墳
6 仙台今城後	古墳	古墳
7 仙台今城左	古墳	古墳
8 仙台今城右	古墳	古墳
9 仙台今城東	古墳	古墳
10 仙台今城西	古墳	古墳
11 仙台今城北	古墳	古墳
12 仙台今城南	古墳	古墳

第2図 燕沢遺跡の位置と周辺の遺跡

2. 歴史的環境

燕沢遺跡の周辺には七北田川两岸の丘陵部分と自然堤防部分を中心に数多くの遺跡が分布している。

仙台市内の縄文時代の遺跡は丘陵・段丘上や沖積平野の自然堤防上で確認されている。燕沢遺跡の周辺では岩切畠中遺跡で縄文土器が採集されているが、構造は確認されていない。

古墳時代では、浦ノ果遺跡で古墳時代中期の竪穴住居跡や溝跡などが、燕沢遺跡で古墳時代前期の竪穴住居跡が確認されており、居住域が存在していたことが判明している。七北田川流域の自然堤防上では、古墳時代の終末期から奈良時代にかけて善応寺、東光寺、台屋敷、入生沢で横穴墓群が造営される。このうち善応寺横穴墓群には100基を超える横穴墓があると推定されており、昭和53年(1978)に仙台市指定史跡になっている。このうち23基の横穴墓で発掘調査が実施されており、土師器や須恵器、鉄刀、鐵鎌、ガラス製小玉、金銅環などが出土している。大蓮寺窯跡では古墳時代中期の須恵器を焼いた窯跡が見つかっており、東北地方で発見されている最古の須恵器窯跡である。また大蓮寺窯跡では7世紀末から8世紀初頭の單弁蓮華軒丸瓦とロクロ焼き重弧文軒平瓦が出土している。

奈良時代になると燕沢遺跡の東北東側約5kmの位置に陸奥国府である多賀城が神亀元年(724)に造営される。燕沢遺跡の南南西約5kmの位置に陸奥郡分寺・郡分尼寺が天平13年(741)に出された詔によって造営される。多賀城

と陸奥国分寺・国分尼寺に供給される瓦の生産は台原・小田原丘陵上で行われ、一大窯業地帯として栄えていたことが判明している。燕沢遺跡でも、宝相華文軒丸瓦など多賀城IV期の瓦が出土している。

3. 過去の調査の概要

燕沢遺跡は昭和 25 年(1950)に刊行された『仙臺市史 3 別編 1』の中で表掲された単弁蓮華文軒丸瓦が紹介されており、古代の瓦が散布していることで注目された遺跡である。

燕沢遺跡内では昭和 56 年(1981)の宅地造成に伴う発掘調査をはじめとし、これまで 13 次にわたる発掘調査が実施されている(表 1)。遺構の残存状況は良好ではないが、豊穴住居跡や溝跡、掘立柱建物跡などが確認されている。このうち今回の調査区の西側に隣接する第 8 次調査では、南北 4 間、東西 7 間以上の二面廻の掘立柱建物跡(SB2)が検出されており、寺院の「僧房」と推定されている。SB2 掘立柱建物跡の北側 15 m の位置には、建物と同じ方向の溝跡(SD7)が検出されており、建物群を区画した溝と考えられ、建物跡と溝跡は出土した遺物から 10 世紀前半代の時期と考えられている。また、第 8 次調査の南側の第 9 次・第 10 次調査でも掘立柱建物跡(SB3、SB5)が検出されている。SB3 建物跡は出土遺物から 9 世紀後半から 10 世紀前半のものと考えられ、建物の方向の違いから SB2 建物跡と SB3 建物跡は建てられた時期が異なると考えられる。遺物の中には瓦が多数含まれており、多賀城創建期以前の瓦と多賀城 II 期以降の瓦が確認されている。そのほか第 2 次調査では豊穴住居跡から「右婦人カ」を書かれた漆紙文書と陶硯が、第 2 次、第 3 次、第 9 次調査では墨書き土器が出土しており、底部に「讀院口」と墨書きされている須恵器がある。これまでの調査での遺構の検出状況と出土遺物から燕沢遺跡内には瓦葺きの建物が存在し、寺院もしくは官衙などの古代の重要施設が存在していたことが考えられる。

調査次数	調査原因	調査年度	調査面積	主な発見遺構	主な出土遺物
1次	宅地造成	1981	720m ²	【平安】掘立柱建物跡、溝跡、土坑	【陶文】右婦人丁 【陶器】土器 【陶器】舟形 【陶器】丸瓦、平瓦 【平安】切妻土器 【陶器】灰陶器、灰陶陶器、丸瓦、平瓦
2次	区画整理	1982	3,750m ²	【古墳】豊穴住居跡 【平安】豊穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	【陶文】埴輪土器(織機土器)、石器 【陶生】赤土土器(縄文時代中期) 【陶器】土器 【陶器】舟形 【陶器】丸瓦、平瓦 【平安】赤土土器 【陶器】帶土土器、赤燒土器、須恵器、陶器、漆紙文書、軒平瓦、丸瓦、平瓦
3次	擁理工事	1987	350m ²	【平安】豊穴住居跡、溝跡	【陶文】埴輪土器(織機土器)、石器 【陶生】赤土土器 【陶器】舟形 【陶器】丸瓦、平瓦 【平安】切妻土器、須著土器、須恵器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦
4次	宅地造成	1989	338m ²	【平安】豊穴住居跡、掘立柱建物跡	【陶器】舟形 【平安】切妻土器、丸瓦、平瓦
5次	宅地造成	1990	300m ²	【奈良】土坑	【陶器】舟形 【平安】切妻土器 【平安】切妻土器、赤燒土器、須著土器、軒丸瓦、丸瓦、平瓦
6次	宅地造成	1990	105m ²	【古墳】豊穴住居跡?	【平安】丸瓦、平瓦
7次	範例確認	1993	400m ²	【古墳】豊穴住居跡 【平安】掘立柱建物跡、溝跡	【古墳】土器 【陶器】舟形 【陶器】軒平瓦、丸瓦、平瓦 【平安】赤土土器、軒平瓦、丸瓦、平瓦
8次	範例確認	1994	400m ²	【平安】掘立柱建物跡(傍切)、溝跡、豊穴遺構	【陶器】舟形 【平安】切妻土器、赤燒土器、須著器、灰陶陶器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦 【器皿品種別】
9次	範例確認	1995	450m ²	【平安】掘立柱建物跡、豊穴遺構	【陶器】舟形 【平安】軒平瓦、平瓦 【平安】切妻土器、須著土器、須著器、軒平瓦、丸瓦、平瓦
10次	範例確認	1996	400m ²	【平安】柱列、溝跡、豊穴遺構	【陶器】舟形 【平安】切妻土器、須著器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦
11次	範例確認	1997	400m ²	【平安】柱列 豊穴住居跡、土坑不明遺構、土坑	【陶器】舟形 【平安】切妻土器、舟形 【平安】切妻土器、須著器、須著器、陶瓶、丸瓦、平瓦 【平安】切妻土器、平瓦
12次	宅地造成	2005	36m ²	溝跡	【陶器】舟形 【平安】切妻土器、ピット
13次	個人住宅建築	2009	21m ²	作格不明遺構、ピット	【平安】切妻土器、丸瓦、平瓦 【陶文】埴輪土器、石器
14次	道路拡幅	2015	540m ²	【陶文】豊穴住居跡、土坑 【平安】豊穴住居跡、溝跡	【陶文】埴輪土器、舟形 【陶器】舟形 【平安】切妻土器、須著器、赤燒土器、軒平瓦、丸瓦、平瓦

表 1 燕沢遺跡の発掘調査概要

第4節 調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査区は拡幅工事の法面掘削部分にあたる範囲を対象とし、幅約5m×長さ約120mで調査面積は540m²である。調査区を南側からI区、II区、III区、IV区、V区とした。

調査の計測作業は用地測量で設置された基準点を原点として使用し、調査区の周辺に新たな基準点を設置して行った。

表土掘削はバックホー0.25m³を使用し、I区はIV層上面、II区はIII b層上面、III区はIV層上面、IV区はIII a層とIII b層上面、V区はIII a層上面で遺構検出を行った。

検出遺構は必要に応じて写真撮影、断面図、平面図、土層注記の記録をとった。写真撮影はデジタルカメラを使用した。平面図はトータルステーションを使用し、CADソフトで計測を行い、断面図は手実測による縮尺20分の1の図面を作成し、作図・編集をグラフィックソフトIllustrator(Adobe Systems)で作図した。

2. 調査の経過

(1) 野外調査

野外調査は平成27年9月1日から11月30日の間で計37日間行った。9月3日から調査区周辺の除草・伐採などの環境整備を行い、環境整備の終了後にI区の南側とV区の北側から重機で表土掘削を行った。掘削が終了した箇所から人力による遺構確認の作業を行った。10月5日からIV区とV区で検出された遺構の調査を開始し、11月6日には全ての遺構の調査を終了した。11月9日に埋戻しを実施し、11月30日に野外調査を終了した。

(2) 整理作業

整理作業は平成27年12月1日から平成28年3月28日の期間で実施した。



第3図 調査区の位置図

第2章 基本層序

今回の調査で確認した基本層は現代の盛土を除き、大別5層、細別8層である。I区では調査区全面で擾乱が確認されており、遺構面まで削平されたと考えられる。以下、基本層の概要である。

I層 煙の耕作土。色調と含有物で3層に分層した。

I a層：暗褐色シルトである。層厚は5～80cmである。

I b層：黒褐色粘土質シルトである。V区で確認された。層厚は0～30cmである。

I c層：黒褐色粘土質シルトである。凝灰岩粒を少量含む。層厚は0～20cmである。

II層 黒褐色粘土質シルトである。II区の南側の一部で確認された。層厚は0～20cmである。I c層の母材層と考えられる。

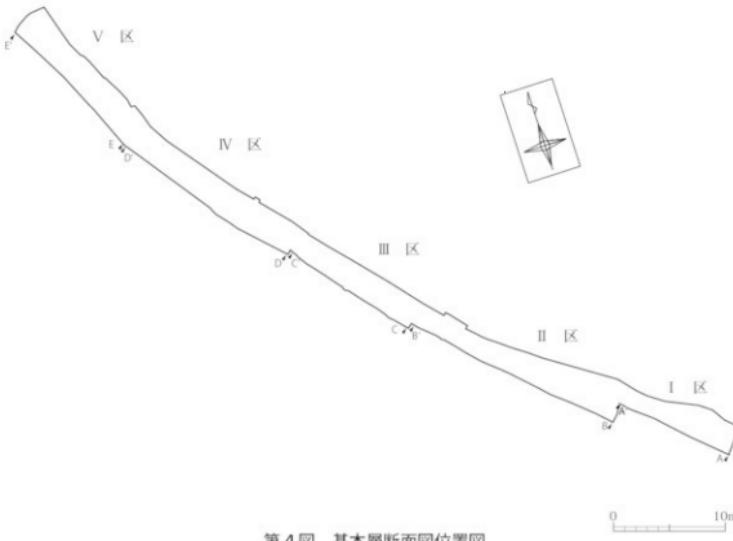
III層 黄褐色粘土であり、含有物で2層に細分した。

III a層：黄褐色粘土である。層厚は0～15cmである。IV区とV区の遺構検出面である。

III b層：黄褐色粘土で、風化した凝灰岩ブロック（径10～50mm）、と凝灰岩粒を少量含んでいる。II区とIV区の一部の遺構検出面である。層厚は0～35cm以上である。

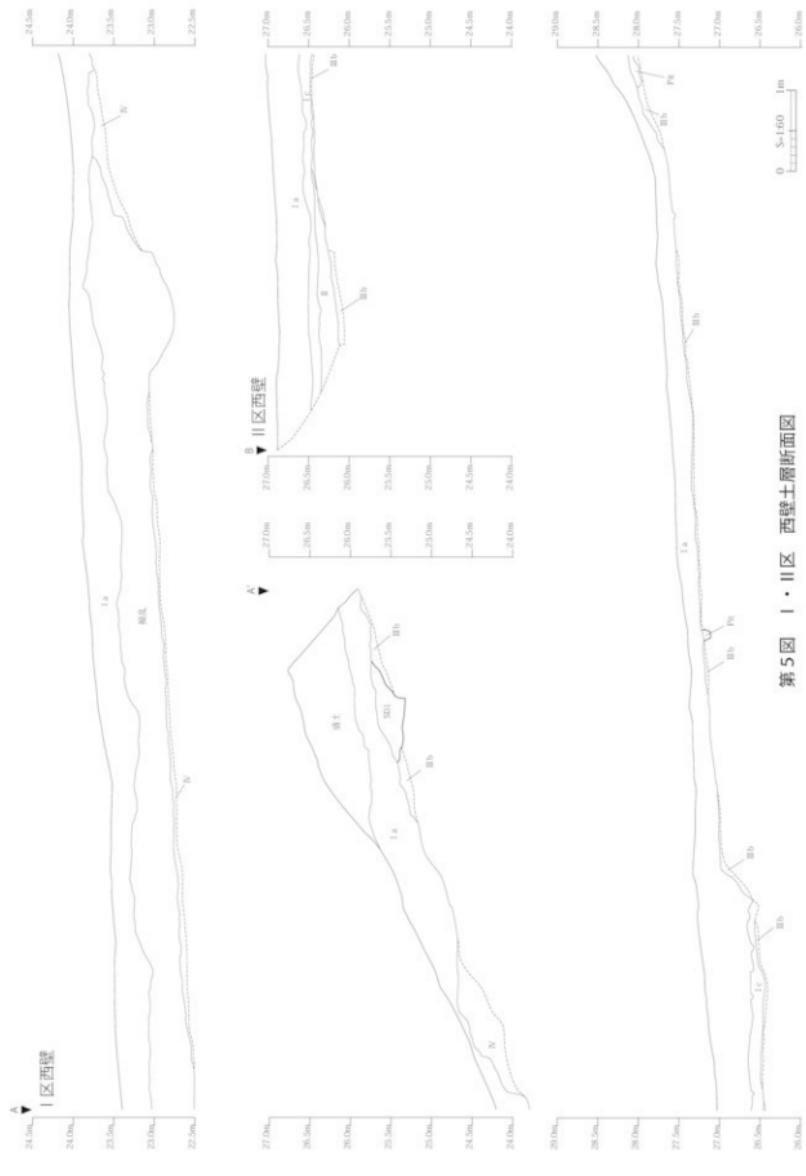
IV層 にぶい黄色の風化した凝灰岩である。しまりがあり、非常に硬い。III区の遺構検出面である。層厚は10～40cm以上である。

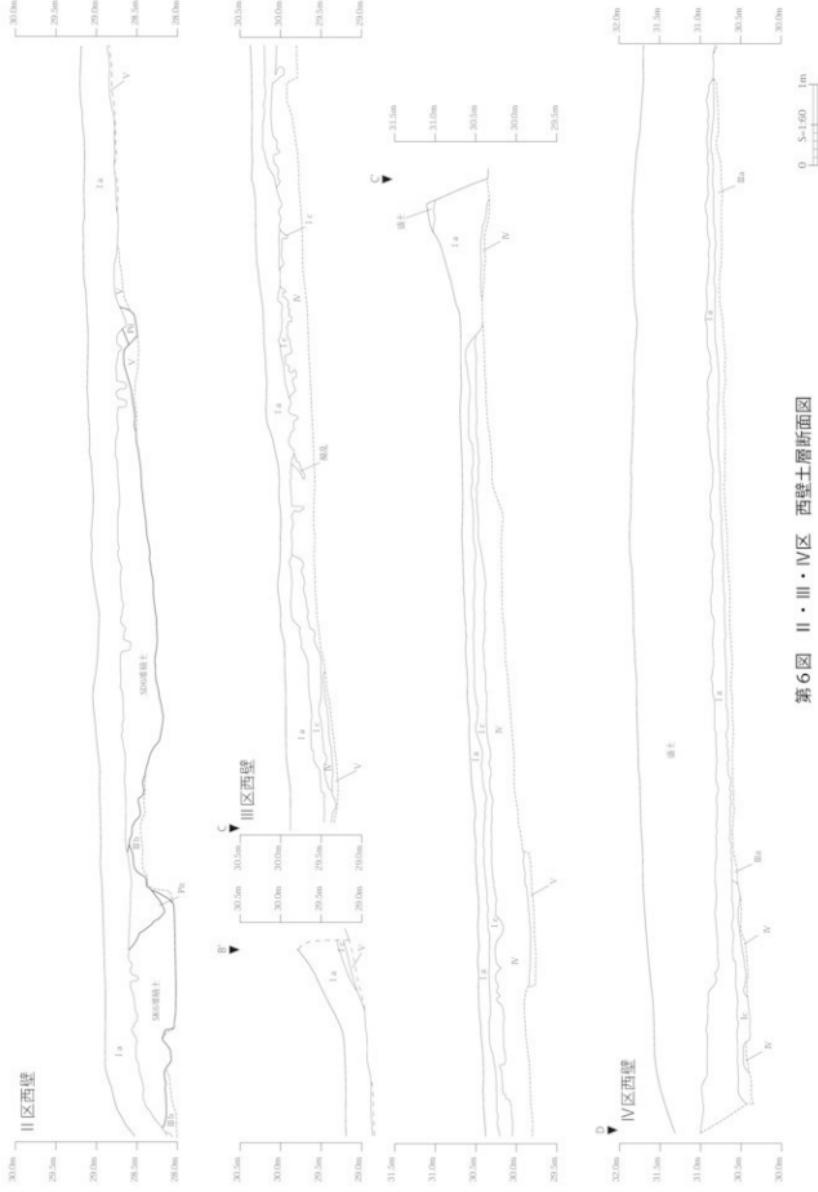
V層 黄褐色の粘土である。小礫と凝灰岩粒、砂を多量に含む。層厚は40cm以上である。



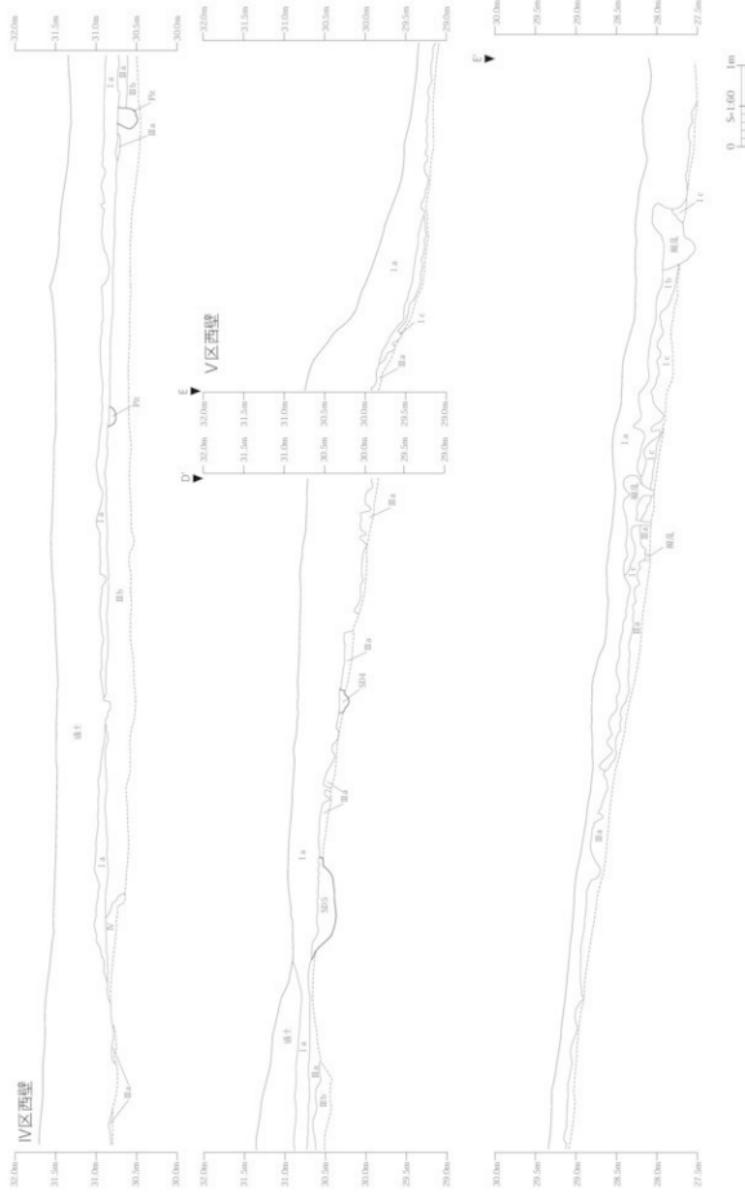
第4図 基本層断面図位置図

第5图 I・II区 西壁土层断面图

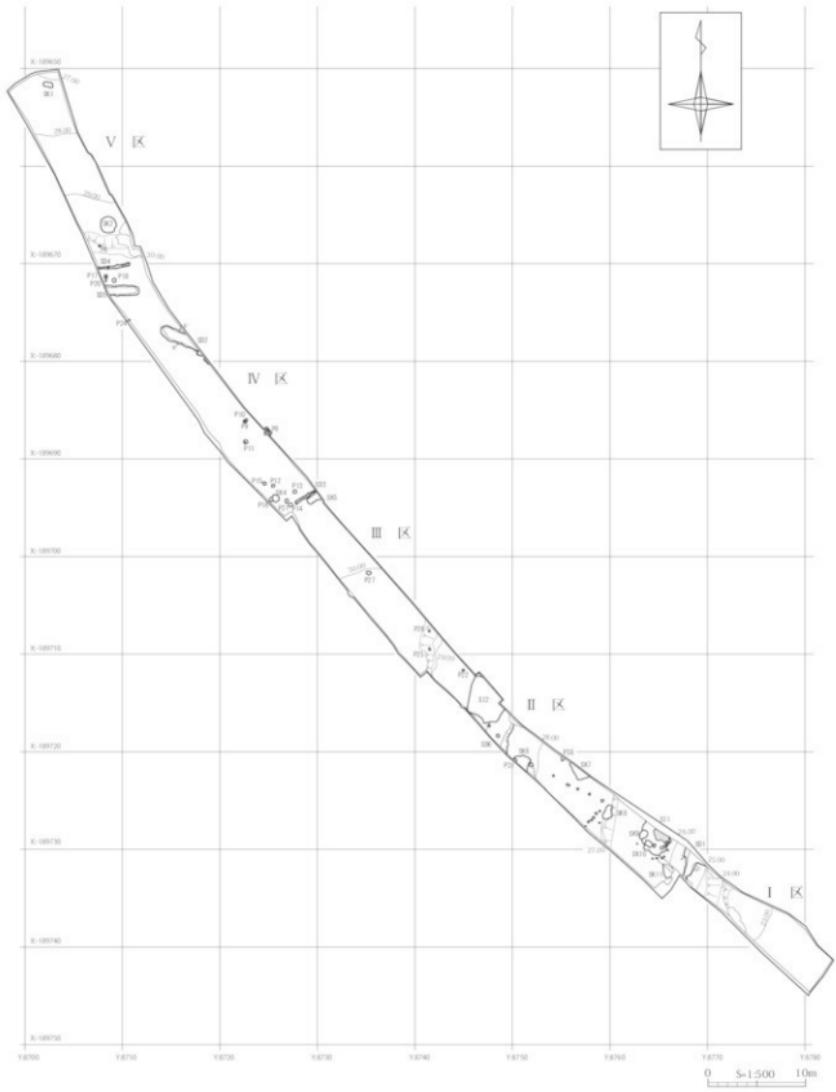




第6图 II・III・IV区 西壁土层断面图



第7図 IV・V区 西壁土層断面図



第8図 遺構配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

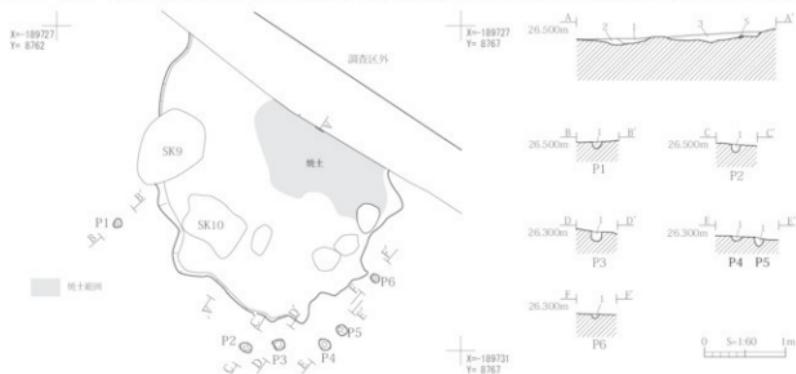
今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、溝跡6条、土坑10基、ピット38基である。時期は縄文時代前期と平安時代である。出土遺物は、縄文土器と土器師、須恵器、瓦、石器、金属製品などである。

(1) 竪穴住居跡

S11 竪穴住居跡

【位置・重複】 II区の南東側に位置する。全面的に後世の削平を受けており、残存状況がよくない。重複する SK9 と SK10 より古い。

【平面形・規模】 北側が調査区外に及んでいるが、検出された状況から平面形は楕円形であると考えられる。検出し



S11竪穴住居跡堆積土 土層注記表

	土色	土質	鉱人物・備考
1	2.5YR3/3 暗赤褐色	粘土質シルト	塊状剖面、炭化物を極少量含む。黒褐色粘土質シルトを斑に含む。
2	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	7.5YR2/2粘土質シルトを斑に含む。鐵土を極少量含む。
3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	塊状粘土を多く含む。

S11竪穴住居跡柱穴 土層注記表

遺構名	位番	土色	土質	鉱人物・備考
P1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	に(3)- 黒褐色粘土を少量含む。炭化物を極少量含む。
P2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	塊状粘土を含む。鐵土を極少量含む。
P3	1	10YR2/3 暗褐色	粘土	塊状粘土上に塊状粘土を少量含む。鐵土を極少量含む。
P4	1	10YR2/3 暗褐色	粘土	塊状粘土を多く含む。
P5	1	10YR2/2 暗褐色	粘土	塊状粘土をやや多く含む。
P6	1	10YR4/4 褐色	粘土	塊状粘土を極少含む。



S11竪穴住居跡 出土遺物観察表

位番	位番	出土層位	種別	面積	部位	法面 (cm)		文様・調査	特徴・備考	写真 写真
						口縁	底径			
1	A-1	堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.0) ループ文	透空口縁 縄文土器	4-1
2	A-2	堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.8) 沈線?	透空口縁	4-2
3	A-3	堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.1) 【外面】透空口縁本体不同 【内部】沈線	透空口縁	4-3
4	A-4	堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.1) ループ文	透空口縁	4-4
5	A-5	堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.0) 【外面】ループ文 (R型) 【内部】えぐ牛	透空口縁	4-5

第9図 S11 竪穴住居跡 平面図・断面図・出土遺物

た規模は、東西が305cm、南北357cm以上である。

【堆積土】3層に分層した。1層は炭化物粒と凝灰岩粒を含む焼土層である。2層は焼土粒を含む黒褐色粘土質シルトである。3層は凝灰岩粒を多く含む褐色粘土質シルトで住居の堆積土である。

【床・壁】残存する壁高は5cmである。南西壁の周辺が高くなっている。床面は焼土分布範囲付近で高くなっている。

【柱穴】住居跡の外周で、径9~15cmのピットを連続して検出した(P1~6)深さは5~11cmである。壁外柱穴である可能性が考えられる。

【その他の施設】住居跡の中央部で焼土分布範囲を検出した。平面形は不整形で、規模は東西168cm以上、南北152cm以上、深さが7cmである。地床炉である可能性が考えられる。

【出土遺物】竪穴住居跡の堆積土と焼土の堆積土中から縄文土器が出上している。全て深鉢の破片で、5点を図化した。A-1(第9図-1)は口縁部が外傾するもので、波状口縁である。胎土中には繊維と石英粒が含まれている。口縁部周縁の地文はループ文である。A-2(第9図-2)は胴部の破片で、胎土中には繊維が含まれている。磨滅しており、施文は沈線と考えられる。A-3(第9図-3)は胴部の破片で、胎土中には繊維と石英粒が含まれている。磨滅しており、地文の原体は不明である。内面に浅い沈線が2条施されている。A-4(第9図-4)は胴部の破片で、胎土中には繊維が含まれている。地文はループ文である。A-5(第9図-5)は口縁部の破片である。胎土中には繊維と石英粒が含まれている。口縁部周縁の地文は環状のループ文である。

SII 竪穴住居跡

【位置・重複】II区の北西側に位置する。重複するSD6、P37より新しい。

【平面形・規模】北東隅が調査区外に及んでいるが、平面形は方形で、北側が広くなっている。西壁で375cm、南壁で330cmである。

【方向】カマドを基準としてN75°-Eである。

【堆積土】8層に分層した。1層は暗褐色粘土質シルトを主体とする住居内堆積土、2~6層はカマド内堆積土、7層は周溝内堆積土、8層は住居掘方埋土である。

【床・壁】床はほぼ平坦である。北側では基本層IV層を、南側では住居掘方埋土を床面としている。壁は西壁で床からやや急角度に立ち上がる。壁高は18cmである。

【掘方】住居掘方埋土は住居の南側のみに確認された。底面はやや起伏がみられる。

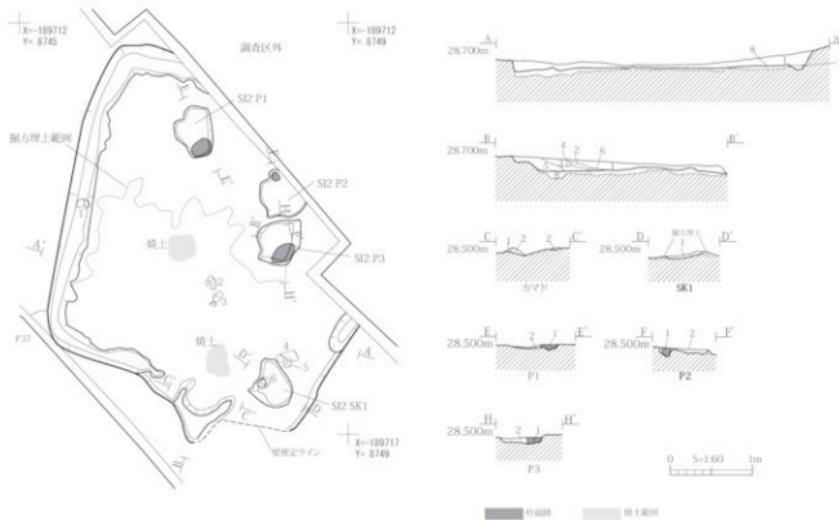
【カマド】南西壁の中央部に位置する。カマドの燃焼部と両袖を確認した。袖の規模は東袖が長さ41cm、幅10~24cm、高さ6cm、西袖が長さ47cm、幅8~21cm、高さ6cmで、袖の残存状況は良くない。袖は壁面に対してハの字状に付設する。燃焼部の規模は奥行き76cm、幅35cmである。燃焼部の底面は平坦で、奥壁部分で緩やかな角度で8cmほど立ち上がり、煙道部に繋がっていたと考えられる。

【柱穴】床面から柱穴が3基検出された。全て柱痕跡を有する。P1の平面形は不整円形で規模は径61cm、深さ5cmである。柱痕跡は径25cm、深さが6cmである。P2の平面形は不整円形で規模は径67cm、深さは6cmである。柱痕跡は径10cm、深さが10cmである。P3の平面形は不整円形で規模は径60cm、深さは7cmである。柱痕跡は径35cm、深さが9cmである。

【周溝】西壁と南壁のカマドより西側、北壁の西側、東壁の一部で検出した。規模は幅が15~26cm、深さが6cmで断面形状はU字状である。

【その他の施設】床面で土坑を1基(SK1)確認した。平面形は不整円形である。規模は長軸が59cm、短軸が44cm、深さが4cmである。堆積土は1層で暗褐色粘土である。カマドの東側の位置で検出しており、貯蔵穴と考えられる。

【出土遺物】竪穴住居跡の床面と堆積土、カマド内堆積土、SK1堆積土内からロクロ土師器と赤焼土器、須恵器、平瓦が出土している。このうちロクロ土師器5点、赤焼土器2点、須恵器4点、平瓦3点を図化した。外面上に黒色の付着物があるロクロ土師器D-3を写真図版に掲載した。竪穴住居跡の床面で出土した遺物はD-4(第11図1)のロクロ土師器環とG-1(第12図1)の平瓦である。ロクロ土師器は全て环で、ロクロ調整後に内面が横方向のヘラミ



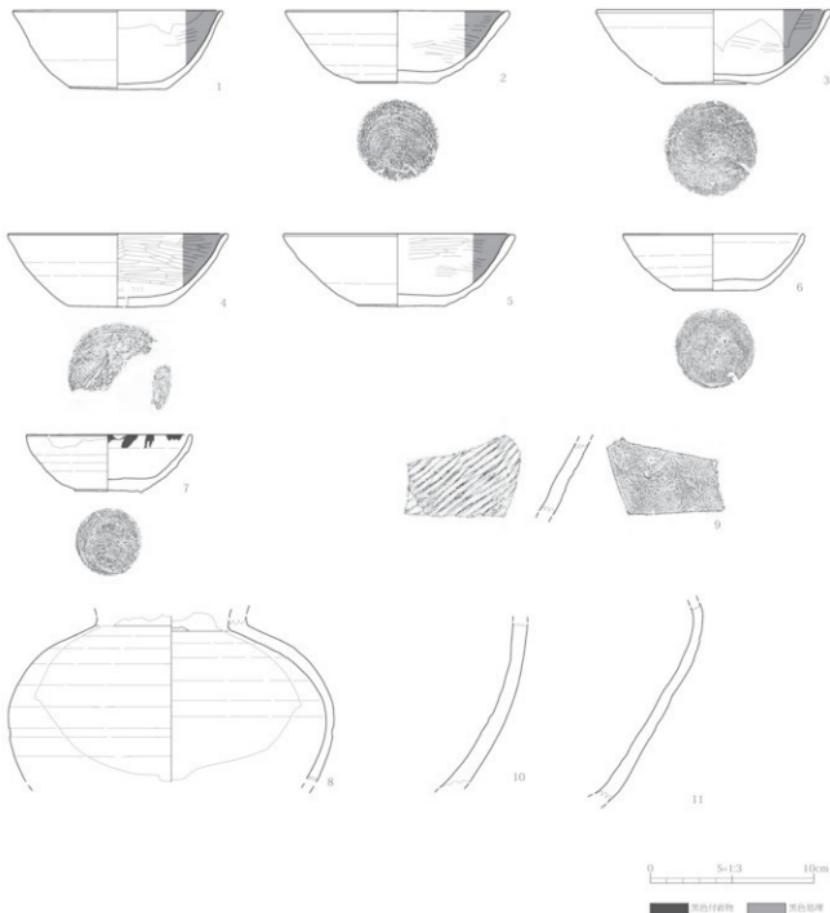
SI2 穫穴住居跡 土層注記表

	土色	土質	記入物・備考
1	10YR3/3 黑褐色	粘土質シルト	腐灰岩粒を多く含む。腐灰岩ブロックと炭化物粒を少額含む。【柱脚標示】
2	10YR3/4 暗褐色	粘土	腐灰岩ブロック、腐灰岩粒を中多く含む。炭化物粒、粘土を少額含む。
3	10YR2/2 黒褐色	粘土	粘土ブロック、腐灰岩粒を多く含む。腐灰岩粒、炭化物粒を少額含む。【分マド内埋積土】
4	10YR2/2 黑褐色	粘土	炭化物粒を中多く含む。腐灰岩粒を多額含む。【柱脚内埋積土】
5	10YR3/3 暗褐色	粘土	腐灰岩粒を多額に含む。腐灰岩ブロック、炭化物粒を少額含む。【分マド内埋積土】
6	10YR1/1 黑色	粘土質シルト	炭化物粒を多く含む。粘土を少額含む。【西溝】
7	10YR3/3 暗褐色	粘土	腐灰岩粒をやや多く含む。腐灰岩粒を多額に含む。腐灰岩ブロックを少額含む。
8	10YR6/4 にじい黄褐色	粘土	腐灰岩色粘土ブロックをやや多く含む。腐灰岩粒を多額に含む。腐灰岩ブロックを少額含む。【柱脚標示】

SI2 穫穴住居跡 施設土層注記表

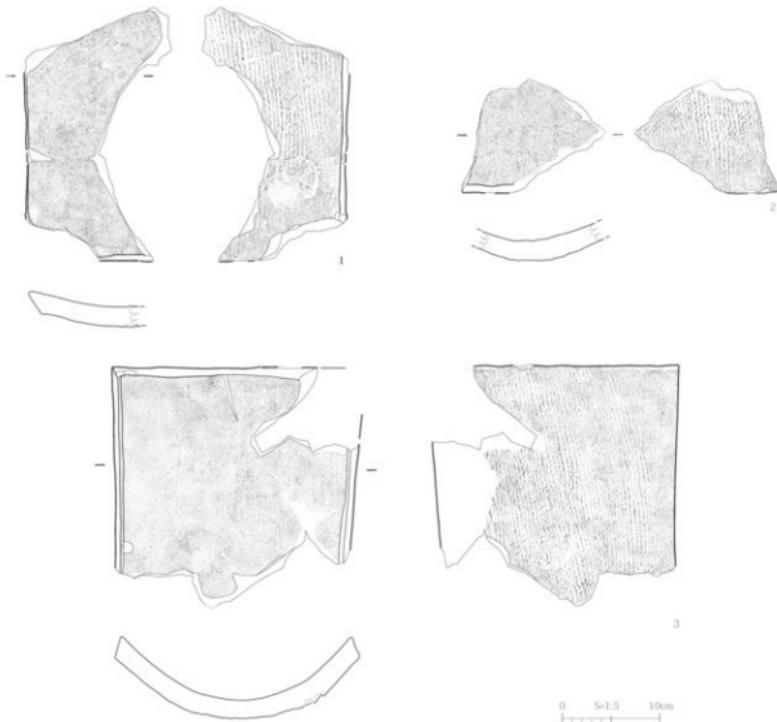
遺構名	層位	土色	土質	記入物・備考
ガマ下階	1	10YR4/4 黒色	粘土	【分マド施設塗】
	2	10YR5/4 にじい黄褐色	粘土	腐灰岩粒を少額含む。【分マド施設塗】
SK1	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	腐灰岩粒と炭化物粒をやや多く含む。粘土を少額含む。
	2	10YR4/4 黑褐色	粘土質シルト	腐灰岩粒を多く含む。腐灰岩小ブロックを少額含む。【柱脚跡】
P1	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	腐灰岩粒を多く含む。腐灰岩小ブロックを少額含む。【柱脚跡】
	2	10YR4/4 黑褐色	粘土質シルト	腐灰岩ブロックを多く含む。【柱脚方陣】
P2	1			【柱脚跡】
	2	10YR4/4 黑褐色	粘土質シルト	腐灰岩ブロックを多く含む。【柱脚方陣】
P3	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	腐灰岩粒を少額含む。羽根状腐灰岩粒と砂シルトを脈状に脈状に含む。【柱脚跡】
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	腐灰岩粒を多く含む。腐灰岩ブロックを脈状に含む。【柱脚方陣】

第10図 SI2 穫穴住居跡 平面図・断面図



第 11 図 SI2 竪穴住居跡出土遺物 (1)

No.	登録番号	出土層位	種別	測量	法量 (cm)			調査	特徴・備考	写真回数
					口径	底径	深さ			
1	D-4	床面	瓦質土器底	环	(12.8)	4.8	5.9	クロロ調整	ヘラミガキ→黑色處理	切り離し不明
2	D-5	カマド内埋植土	瓦質土器底	环	(13.7)	4.4	5.0	クロロ調整	ヘラミガキ→黑色處理	4-6
3	D-6	カマド外埋植土	瓦質土器底	环	(14.2)	4.5	5.8	クロロ調整	ヘラミガキ→黑色處理	4-7
4	D-7	SK1埋積土	瓦質土器底	环	(13.4)	4.5	6.1	クロロ調整	ヘラミガキ→黑色處理	4-8
5	D-8	廻溝	瓦質土器底	环	(14.2)	4.4	5.3	クロロ調整	ヘラミガキ→黑色處理	4-9
6	D-1	柱跡内埋植土	赤燒土器	环	(11.1)	3.4	5.0	クロロ調整	クロロ調整	切り離し不明
7	D-2	柱跡内埋植土	赤燒土器	环	(10.1)	3.5	4.1	クロロ調整	クロロ調整	4-12
8	E-1	柱跡内埋植土	須志窯	長筒形	—	—	—	クロロ調整	クロロ調整	4-13
9	E-3	柱跡内埋植土	須志窯	壺	—	—	(4.5)	平行タタキ目	ヘラナゲ	4-15
10	E-2	柱跡内埋植土	須志窯	壺	—	—	0.9	ヘラケツリ	ヘラナゲ	4-16
11	E-4	柱跡内埋植土	須志窯	壺	—	—	(12.0)	ヘラナゲ	ヘラナゲ	4-17



器 種 番 号	分 類	出土層位	種別	法量 (cm)			文様・調整	特徴・備考	年 代
				地	幅	厚さ			
1 G-1	床面	平底	[26.1] (15.0) (2.1)	[凸面] 繩叩き目 [凹面] 布目縫→ナデ					4-19
1 G-2	六寸引内側縫	平底	[11.7] (14.7) (2.2)	[凸面] 繩叩き目 [凹面] 布目縫→ナデ					4-20
1 G-3	堆積土	平底	[24.8] 25.4 2.4	[凸面] 繩叩き目 [凹面] 布目縫→ナデ				堆土中に須恵器破片混入	4-18

第12図 SI2 積穴住居跡出土遺物（2）

が半後に黒色処理されている。D-5(第11図2)とD-6(第11図3)の内面は被熱によって黒色処理が消失している。D-4、5、6、7(第11図1～4)の底部の切り離しは回転糸切りである。D-4の器形は体部が内湾して立ち上がり、口縁部が外反している。D-5の器形は体部が緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は外傾している。D-6の器形は体部から口縁部が内湾して立ち上がり、口唇部に厚みがある。D-7の器形は体部が内湾して立ち上がり、口縁部は外傾している。D-8(第11図5)の器形は体部が内湾し、口縁部は外傾している。D-1、2(第11図6・7)は赤焼土器である。赤焼土器は全てロクロ成形で、底部の切り離しは回転糸切である。D-1の器形は体部が内湾して立ち上がり、口縁部は外傾している。D-2の器形は体部から口縁部まで内湾して立ち上がっている。E-1～4(第11図8～11)は須恵器である。E-1は長頸壺の体上部から頸部の破片である。E-2とE-3、E-4は甕の体部破片である。E-2の外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデ、E-3の外面は平行叩き目、E-4の底部周辺にヘラケズリ調整が確認される。G-1～3(第12図1～3)は平瓦である。G-1は平瓦の破片である。焼成時に生じた形状の歪みがある。凸面には縦方向の繩叩き目、凹面には織目が細かい布目痕があり、それを切るように斜め方向のナデ調整がある。胎土には砂が含まれる。

れている。G-2は平瓦の破片である。凸面には縦方向の縄叩き目、凹面には布目痕があり、縦方向のナデ調整がある。G-3は平瓦の破片で周縁と両側縁部が残存している。凸面には斜め方向の縄叩き目、凹面には布目痕がある。凸面に須恵器の破片が瓦の中に入り込んでおり、須恵器の破片が瓦の胎土に混入した状態で焼成された瓦である。

(2) 溝跡

溝跡は6条が検出された。II区ではSD1とSD6が、IV区ではSD2とSD3、SD4、SD5が検出された。このうちSD4は溝状の遺構ではあるが、畑の耕作痕跡と考えられる。SD1とSD6は南北方向に走行し、SD2とSD4、SD5は東西方向に走行する。このうち遺物が出土したSD5とSD6について詳細な記述をする。

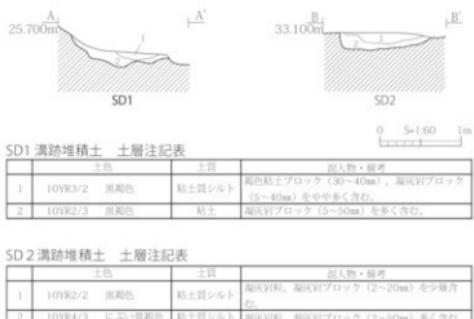
SD5 溝跡

【位置・重複】IV区の北側に位置する。重複する遺構はない。

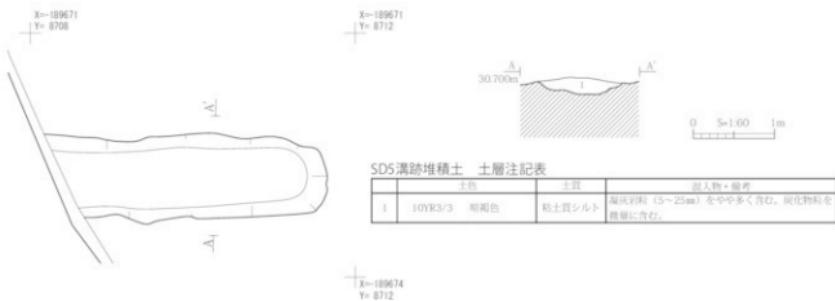
【平面形・規模・方向】検出長335cmで、西端は調査区外へ延びる。上端幅110cm、下端幅75cm、深さ9~22cmである。断面形はU字形である。方向はN-88°-Eである。底面には凹凸があり、東から西に向かって低くなる。

【堆積土】堆積土は単層である。暗褐色粘土質シルトで自然堆積である。

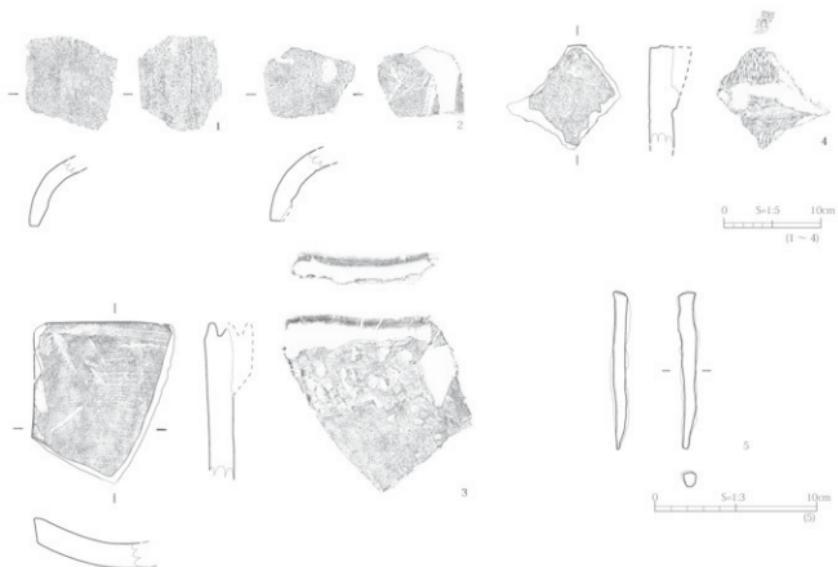
【出土遺物】溝の堆積土からロクロ土師器、須恵器、丸瓦、軒平瓦、平瓦、金属製品が出土している。このうち丸瓦2点と軒平瓦2点、金属製品1点を図化した。F-1(第15図1)とF-2(第15図2)は丸瓦の破片である。F-2の凹面の布目痕の織目は緻密である。G-4(第15図-3)は軒平瓦で、瓦当面の文様はロクロ挽き重弧文である。顎面が剥落した部位には格子叩き目痕がある。凸面は縦方向の丁寧なナデ調整、凹面は布目痕とナデ調整である。G-5(第15図-4)は軒平瓦の破片である。瓦当面がわずかに残存しており、均整唐草文の花の文様の一部が確認できる。凸面は縦方向の縄叩き目、凹面は織目が細かい布目痕である。N-1(第15図-5)は金属製品で釘である。



第13図 SD1・2溝跡 平面図・断面図



第14図 SD5 溝跡 平面図・断面図



番号	登録番号	出土層位	種別	法算 (cm)			文様・調整	特徴・備考	写真回数
				長	幅	厚さ			
1	F-1	埋積土	瓦瓦	110.4	13.5	1.6	【凹面】ナデ 【凸面】布目痕		5-1
2	F-2	埋積土	瓦瓦	17.0	17.0	12.2	【凹面】ナデ 【凸面】布目痕		5-2
3	G-4	埋積土	軒平瓦	116.7	11.4	2.7	【底面】切削き裂痕又【凸面】格子叩きナデ 【凹面】布目痕+ナデ		5-3
4	G-5	埋積土	軒平瓦	110.8	11.6	3.4	【底面】切削き裂痕又【凸面】叩き目ナデ 【凹面】布目痕		5-4
5	N-1	埋積土	金属性製品	9.8	1.2	0.9		打 凹面残存	5-5

第 15 図 SD5 溝跡出土遺物

SD6 溝跡

【位置・重複】II 区の北西側に位置する。重複する SI2 よりも古く、P37 より新しい。

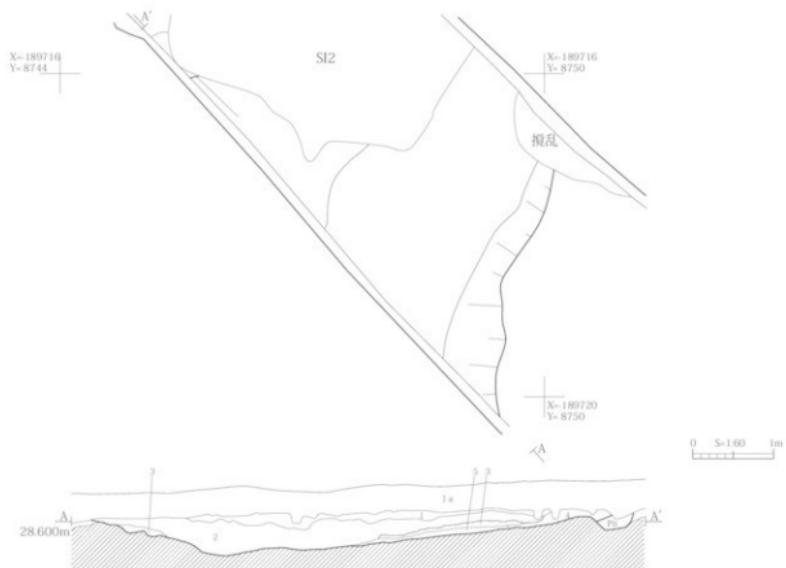
【平面形・規模・方向】検出長は 296cm で、南北両端は調査区外に延びる。上端幅 483cm、下端幅 207cm、深さ 18 ~ 24cm である。断面形は皿状である。方向は N-13°-E である。底面には凹凸があり、南西から北東に向かって低くなる。

【堆積土】5 層に分層した。1 層は暗褐色シルト、2 ~ 4 層は暗褐色粘土質シルト、5 層は褐色粘土である。

【出土遺物】土師器と平瓦が溝の堆積土中から出土している。このうち平瓦 1 点を図化した。G-6(第 16 図-1) は平瓦の破片である。凸面は格子叩き目痕、凹面は糸切り痕と布目痕である。

(3) 土坑

土坑は 10 基が検出された。II 区では SK6 と SK7、SK8、SK9、SK10、SK11、IV 区では SK4 と SK5、V 区では SK1 と SK2 を検出した。SK3 は攪乱だったため欠番とした。SK1 は規模が長軸 98cm、短軸 45cm、深さが 5cm あり、堆積土に焼土が少量含まれている。SK2 は、規模が長軸 165cm、短軸 157cm、深さ 96cm あり、壁は底面から垂直に立ち上がり、検出面に向かって緩やかな角度で立ち上がる。このうち遺物が出土した SK6 と SK8、SK9、SK10 について詳細を記述する。



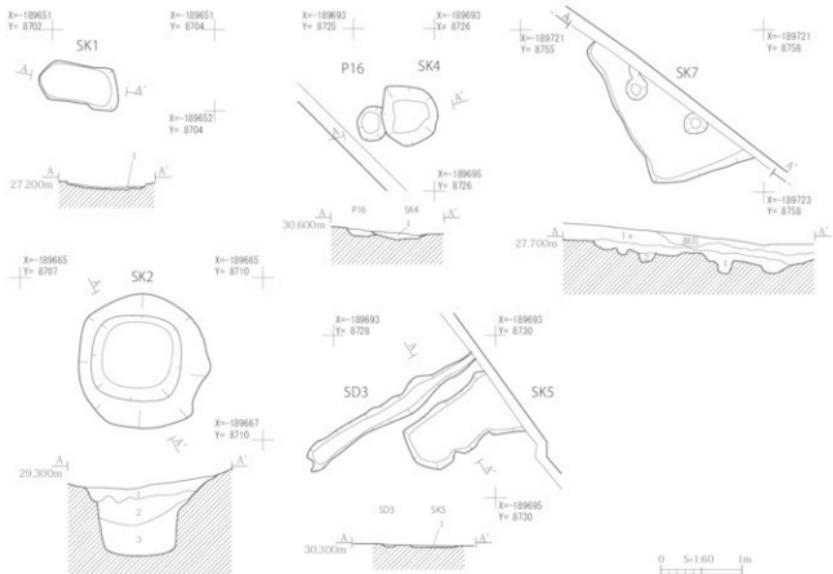
SD6溝跡堆積土 土層注記表

	土色	土質	記入物・備考
1	10YR3/3	細褐色	シルト 腐灰岩粒を少額含む。炭化物粒を数個に含む。
2	10YR3/4	細褐色	粘土質シルト 腐灰岩粒を非常に多く含む。腐灰岩小ブロックを少額含む。炭化物粒を数個に含む。
3	10YR3/4	細褐色	粘土質シルト 腐灰岩ブロックを多く含む。
4	10YR3/4	細褐色	粘土質シルト 腐灰岩粒を多く含む。
5	10YR4/6	褐色	粘土 小礫を多額に含む。

SD6溝跡 出土遺物観察表

No.	分類 通号	出土層位	種別	法量 (cm) 長 幅 厚さ	文様・調整		特徴・参考	写真 図版
					【△面】格子叩き目	【△面】糸切り縫・布目縫		
1	G-6	透視確認部	平瓦	17.9 (5.5) (2.3)				5-6

第 16 図 SD6 溝跡 平面図・断面図・出土遺物



土坑観察表

遺構名	形状(cm)			平面形	層位	土色	土質	剖面人物・備考
	長軸	短軸	深さ					
SK1	98×45	5	楊円形	1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	地土を少量含む。
SK2	165×157	96	不規則形	2	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	廻石岩ブロック(5~20cm)を少量含む。
SK4	87×71	10	不規則形	1	10YR3/4	暗褐色	シルト	廻石岩・廻石円ブロック(10~30cm)やや多く含む。
SK5	(121)×(62)	3	楊円形	3	7.5YR3/4	暗褐色	砂質シルト	廻石質を多く含む。砂を含む多く含む。
SK7	(204)×(131)	24	方形	1	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	廻石岩・廻石・廻石円ブロックを少額含む。
				2	7.5YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	廻石小ブロックを多く含む。

第17図 SK1・2・4・5・7土坑 平面図・断面図

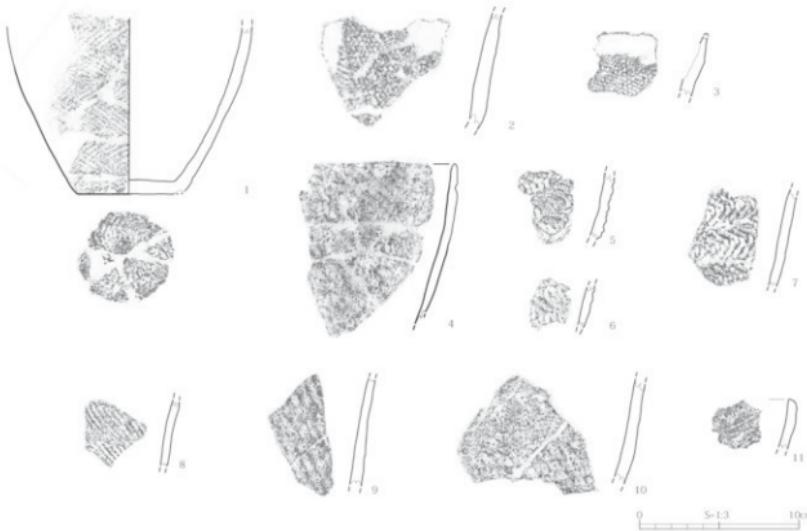
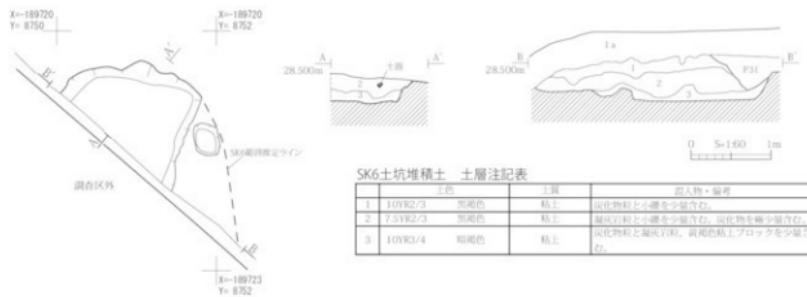
SK6 土坑

【位置・重複】II区の中央部南側に位置する。重複するP31より古い。

【平面形・規模】南側が調査区外に及んでおり、平面形は楕円形と推定される。検出した規模は長軸161cm以上、短軸158cm以上、深さ33cmである。西壁で土坑の堆積土が確認されており、長軸は225cm以上と推定される。断面形は逆台形で、底面には高低差があり、土坑南側では段が付いて16cmほど高くなる。

【堆積土】3層に分層した。1・2層は黒褐色粘土、3層は暗褐色の粘土である。全て自然堆積である。

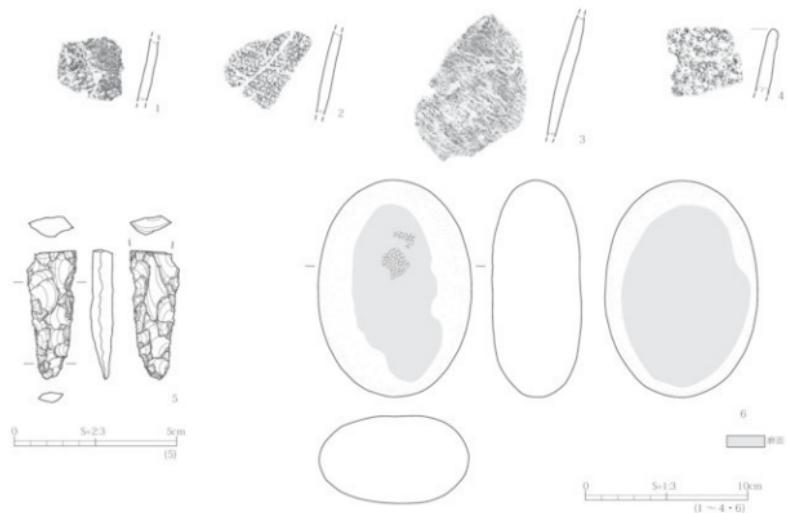
【出土遺物】土坑の堆積土中と底面から縄文土器と石器が出土している。縄文土器は全て深鉢で、このうち縄文土器17点、石器2点を図化した。A-6(第18図-1)は底部から脣下部まで残存しており、脣部は底部からやや内窪して緩やかに立ち上がる。胎土中には繊維と石英粒が含まれている。磨滅が激しいが、脣部の地文は羽状縄文である。底部には竹管による連続した二列の刺突文がある。A-7(第18図-2)は脣部の破片である。胎土には繊維と石英粒が含まれている。磨滅が激しく、地文は不明であるが、一部にループ文が確認される。A-8(第18図-3)は口縁部の破片である。胎土には繊維が含まれている。地文は縄文である。A-10(第18図-4)は口縁部から脣部の上部の破片で、



SK6土坑 出土遺物観察表

No.	發見 場所	出土層位	種別	沿種	部位	比重 (cm)			文様・調査	特徴・備考	写真 図版
						1.0	2.0	3.0			
1	A-6	埋蔵土	陶文土器	深林	300-400	—	6.6	(10.0)	【外側】新葉羽状葉文(朱L+1.R)【底面】側夷文	織維土器	5-9
2	A-7	埋蔵土	陶文土器	深林	胸部	—	—	6.3	【外側】ループ文【内面】毛打牛	織維土器	5-7
3	A-8	埋蔵土	陶文土器	深林	口縁部	—	—	6.8	【外側】L.L.R	織維土器	5-8
4	A-10	埋蔵土	陶文土器	深林	口縁部	—	—	(10.0)	織文(?)印	織維土器	5-15
5	A-11	埋蔵土	陶文土器	深林	胸部	—	—	(4.2)	點束羽状葉文	織維土器	5-10
6	A-12	埋蔵土	陶文土器	深林	胸部	—	—	(2.7)	ループ文(R.L)	織維土器	5-11
7	A-13	埋蔵土	陶文土器	深林	胸部	—	—	(6.1)	【外側】新葉羽状葉文【内面】毛打牛	織維土器	5-16
8	A-14	埋蔵土	陶文土器	深林	胸部	—	—	(4.2)	段多条の輪文	織維土器	5-12
9	A-15	埋蔵土	陶文土器	深林	胸部	—	—	(6.8)	織文(?)印	織維土器	5-13
10	A-17	埋蔵土	陶文土器	深林	胸部	—	—	(6.7)	織文(?)印	織維土器	5-14
11	A-18	底面	陶文土器	深林	口縁部	—	—	(3.0)	織文(L.R. 横印)	底状口縁・織維土器	5-17

第18図 SK6土坑 平面図・断面図・出土遺物 (1)



番号	登録番号	出土層位	種別	埋種	部位	法量(cm)			文様・調整	特徴・備考	写真
						長径	短径	厚			
1	A-19	底面	繩文土器	深鉢	胴部	—	(3.9)	—	繩文(不明)	繩文土器	5-16
2	A-20	底面	繩文土器	深鉢	胴部	—	—	(5.2)	繩文(不明・縦)印和	繩文土器	5-19
3	A-21	底面	繩文土器	深鉢	胴部	—	—	(7.5)	繩文(縦L)	繩文土器	5-21
4	A-23	底面	繩文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.0)	繩文(不明)	繩文土器	5-20

番号	登録番号	出土層位	種別	埋種	法量(cm)			重量(g)	石材	特徴・備考	写真
					長	幅	厚				
5	K-2	堆積土	石器	石器	(4.0)	(1.5)	0.6	3.7	麻灰質白石	欠損	5-22
6	K-3	堆積土	磨石器	磨石	13.3	9.4	5.7	1.050	砂岩	追打面2ヶ所あり	5-23

第19図 SK6 土坑出土遺物（2）

口縁部が外傾している。胎土には纖維が含まれている。磨滅が激しいが、地文は縄文である。A-11(第18図-5)は胴部の破片である。胎土には纖維が含まれている。地文は結束羽状縄文である。A-12(第18図-6)は胴部の破片である。胎土には纖維が含まれている。磨滅しているが、地文はループ文である。A-13(第18図-7)は胴部の破片である。胎土には纖維と石英粒が含まれている。地文は結束羽状縄文である。A-14(第18図-8)は胴部の破片である。胎土には纖維が含まれている。地文は斜行縄文で、O段多条の原体を使用している。A-15(第18図-9)とA-17(第18図-10)は胴部の破片である。磨滅が激しいが、地文は縄文である。A-18(第18図-11)は口縁部の破片で、波状縁で口縁部が外傾している。胎土には纖維が含まれている。地文は横回転の縄文である。A-20(第19図-2)は胴部の破片である。胎土には纖維と石英粒が含まれている。磨滅が激しく、地文は継回転の縄文である。A-21(第19図-3)は胴部の破片である。胎土には纖維が含まれている。地文は縄文である。A-23(第19図-4)は口縁部の破片である。胎土には纖維が含まれている。磨滅しているが、地文は縄文である。K-2(第19図-5)は折れていて全体形状は不明であるが、棒状の石錐と考えられる。錐部は細かな二次加工が施されて作り出されている。K-3(第19図-6)は磨石である。梢円形の河原石を素材としており、表面と裏面に磨痕が、表面に敲打痕が確認された。

SK8 土坑

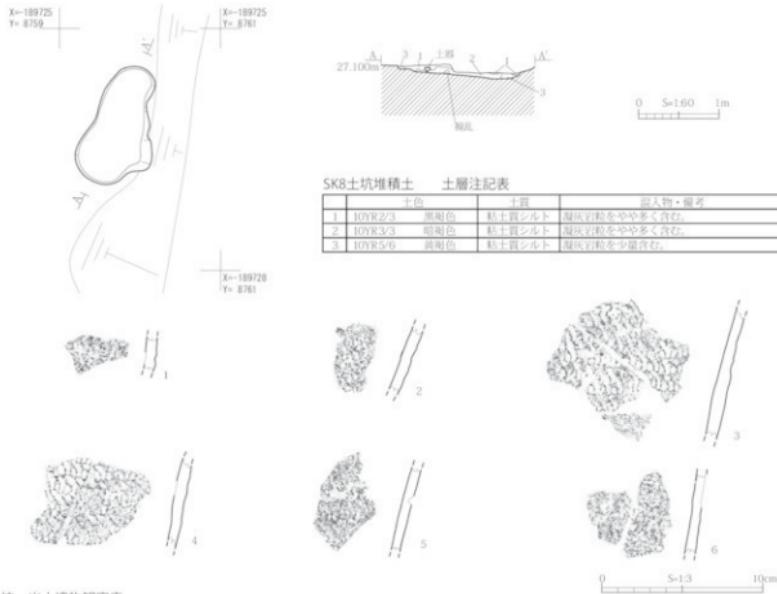
【位置・重複】 II区の中央に位置する。重複する遺構はない。

【平面形・規模】 平面形は不整な長楕円形である。検出した規模は長軸 153cm、短軸 86cm、深さ 12cm である。断面形は浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。

【堆積土】 3 層に分層した。1 層は黒褐色粘土質シルト、2 層は暗褐色粘土質シルト、3 層は黄褐色粘土質シルトである。

【出土遺物】 土坑の堆積土中から縄文土器と石器が出土している。出土した縄文土器は全て深鉢で、このうち 6 点を図化した。A-24(第 20 図-1) は胴部の破片である。胎土には纖維が含まれている。地文はループ文である。A-25(第 20 図-2) は胴部の破片である。胎土には纖維と石英粒が含まれている。磨滅がされているが、地文は複節縄文である。

A-26 ~ 28(第 20 図-3 ~ 5) は胴部の破片である。胎土には纖維が含まれている。地文は結束縄文である。A-26 と A-28 は同一個体の可能性がある。A-29(第 20 図-6) は胴部の破片である。胎土には纖維が含まれている。地文は縄文で、0 段多条の原体を使用している。



SK8 土坑 出土遺物観察表

No.	目録 番号	目録 番号	出土層位	種別	胎土	測定	法線 (cm)	文様・調査	特徴・備考	写真 回数
1	A-2-4		堆積土	縄文土器	深鉢	輪郭	白模	底模	粗糲 (2.2) ループ文 (斜上)	繩帶土器 5-24
2	A-2-5		堆積土	縄文土器	深鉢	輪郭	—	—	(4.9) 現文 (斜上 R)	繩帶土器 5-25
3	A-2-6		堆積土	縄文土器	深鉢	輪郭	—	—	(8.2) 結束縄文 (上斜)	繩帶土器 5-26
4	A-2-7		堆積土	縄文土器	深鉢	輪郭	—	—	(5.7) 結束縄文	繩帶土器 5-27
5	A-2-8		堆積土	縄文土器	深鉢	輪郭	—	—	(5.2) 結束縄文 (上斜 R)	繩帶土器 5-28
6	A-2-9		堆積土	縄文土器	深鉢	輪郭	—	—	(4.9) 0段多条の現文	繩帶土器 5-29

第 20 図 SK8 土坑 平面図・断面図・出土遺物

SK9 土坑

【位置・重複】 II区の東側に位置する。重複する SH1 より新しい。

【平面・規模】 平面形は不整格円形である。検出した規模は長軸 102cm、短軸 73cm、深さ 23cm である。断面形は U 字形である。

【堆積土】 2 層に分層した。1 層は暗褐色粘土質シルト、2 層は褐色粘土である。

【出土遺物】 土坑の堆積土中から縄文土器が出土している。全て深鉢で、このうち 5 点を図化した。A-30(第 22 図 -1) は口縁部の破片で、平縁で口縁部が外傾している。胎土には繊維が含まれており、地文は縄文である。A-31(第 22 図 -2) は胴部の破片である。胎土には繊維と多量の石英粒が含まれている。A-32(第 22 図 -3) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれており、地文はループ文である。A-33(第 22 図 -4) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれており、地文は縄文である。A-34(第 22 図 -5) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれており、地文は縄文である。

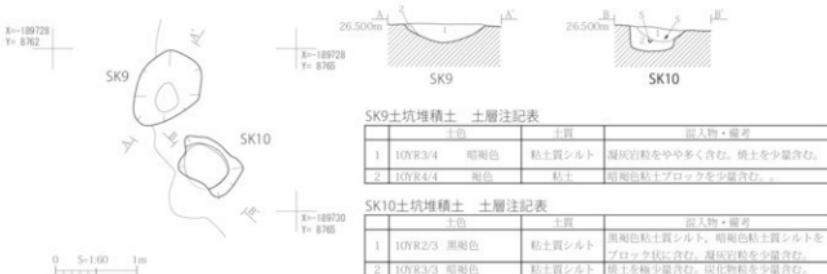
SK10 土坑

【位置・重複】 II区の東側に位置する。重複する SH1 より新しい。

【平面・規模】 平面形は不整円形である。検出した規模は長軸 83cm、短軸 61cm、深さ 30cm である。断面形は北側で壁が垂直に立ち上がる U 字形である。南側では壁が底面から 16cm 程度までは垂直に立ち上がり、段が付いて立ち上がる。土坑の南側では底面が張り出している。

【堆積土】 2 層に分層した。1 層は黒褐色粘土質シルト、2 層は暗褐色粘土質シルトである。

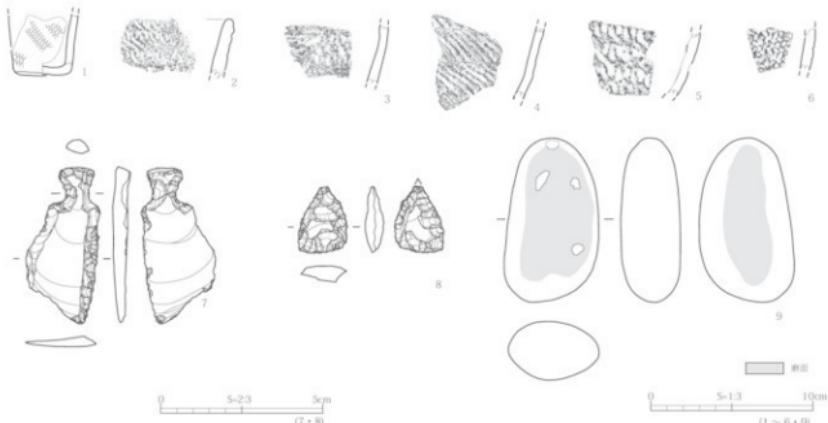
【出土遺物】 土坑の堆積土中から縄文土器と石器が出土した。このうち縄文土器 6 点と石器 3 点を図化した。A-35(第 23 図 -1) はミニチュア土器の破片である。底部から胴部までわずかに外傾する器形である。胎土には繊維が含まれており、胴部の地文は縄文である。A-36(第 23 図 -2) は口縁部の破片で、胎土には繊維が含まれている。地文はループ文で、内面にはミガキが施されている。A-37(第 23 図 -3) は深鉢の破片である。胎土には繊維が含まれており、地文は縄文である。A-38(第 23 図 -4) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれており、地文は縄文である。A-39(第 23 図 -5) は胴部の破片である。胎土には繊維と石英粒が含まれている。地文はループ文である。A-40(第 23 図 -6) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれている。地文は組紐文である。K-4(第 23 図 -7) は石器である。縦長剥片を素材としており、表面の右側縁には細かな二次加工が施されており、直線的な刃部を作出している。石材は珪質頁岩である。K-6(第 23 図 -8) は平基の石鏃である。側縁は緩やかに外弯しているが、先端部を欠損している。裏面には素材の剥離面が残存している。石材は珪質頁岩である。K-5(第 23 図 -9) は磨石である。扁平な河原石を素材としており、表面と裏面に磨面が確認された。



第 21 図 SK9・10 土坑 平面図・断面図



第22図 SK9土坑 出土遺物



第23図 SK10土坑 出土遺物

(4) ピット

ピットは38基(P1～4・6・8～18・20～22・24～27・31・37～50)検出した。ピットの平面の規模は13～57cmであり、深さは2～37cmで、平面形は不整円形が多い。建物跡や柱列を構成するような規則的な配列は確認されなかった。柱痕跡を有するピットは4基(P8・9・11・17)が確認されており、全てIV区から検出された。柱痕跡の径は12～36cmである。

遺構名	調査区	平面形	面積(m)		層位	土色	土質	記入人物・備考	面積
			長軸	短軸					
Pt-1	Ⅲ区	長楕円形	36×20	21	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルトをブロック状に含む。礫を少額含む。	
Pt-2	Ⅲ区	不規則形	37×29	20	1	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルトをブロック状に含む。礫を少額含む。	SH1より新
Pt-3	Ⅲ区	不規則形	25×25	6	1	10YR2/4 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルト、褐色粘土質シルトをブロック状に含む。礫を少額含む。	SH1より新
Pt-4	Ⅲ区	不規則形	37×26	8	1	10YR2/4 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルト、褐色粘土質シルトをブロック状に含む。礫を少額含む。	SH1より新
Pt-6	Ⅳ区	不規則形	26×21	17	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルトをブロック状に含む。礫を少額含む。	SH1より新
Pt-8	Ⅳ区	不規則形	57×45	4	1	10YR2/4 明褐色	粘土	褐色粘土を基盤とする。【柱頭跡】36×28cm	
Pt-9	Ⅸ区	不規則形	36×31	8	1	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。【柱頭跡】21×16cm	Pt1より古い
Pt-10	Ⅸ区	円形	27×23	3	1	10YR2/3 明褐色	粘土	褐色粘土を基盤とする。	Pt9より新
Pt-11	Ⅸ区	円形	45×41	10	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。【柱頭跡】12×10cm	
Pt-12	Ⅸ区	不規則形	32×29	5	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。【柱頭跡】40×35	
Pt-13	Ⅸ区	椭円形	32×32	13	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-14	Ⅹ区	円形	40×38	4	1	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-15	Ⅹ区	不規則形	40×35	2	1	10YR5/4 5% 黑褐色	粘土質シルト	褐色粘土、褐色粘土をブロック状に含む。	
Pt-16	Ⅹ区	不規則形	44×38	9	1	10YR4/4 浅褐色	粘土	褐色粘土、褐色粘土を基盤とする。	
Pt-17	Ⅺ区	不規則形	43×32	20	1	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。【柱頭跡】32×25cm	Pt4より古い
Pt-18	Ⅺ区	不規則形	42×36	17	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。【柱頭跡】32×25cm	
Pt-19	Ⅺ区	不規則形	35×35	3	1	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-20	Ⅺ区	不規則形	16×15	15	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-21	Ⅺ区	不規則形	47×34	11	1	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-22	Ⅺ区	椭円形	28×23	16	1	10YR2/4 黑褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-24	Ⅺ区	(不規)	30	1	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。調査区両端で確認。		
Pt-25	Ⅺ区	円形	29×22	17	1	10YR7/6 明褐色	砂質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-26	Ⅺ区	不規則形	20×19	21	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-27	Ⅺ区	不規則形	52×38	5	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-31	Ⅺ区	不規	31	20	1	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	SH6より新
Pt-37	Ⅺ区	不規	(32)×(20)	27	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	SH2より古い
Pt-38	Ⅺ区	椭円形	130×35	19	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-39	Ⅺ区	円形	19×18	3	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-40	Ⅺ区	椭円形	40×19	14	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-41	Ⅺ区	不規則形	23×21	6	1	10YR2/4 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-42	Ⅺ区	不規則形	22×21	18	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-43	Ⅺ区	不規則形	31×27	29	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-44	Ⅺ区	円形	17×15	16	1	10YR2/4 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-45	Ⅺ区	円形	25×24	30	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-46	Ⅺ区	不規則形	26×21	17	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-47	Ⅺ区	不規則形	27×19	24	1	10YR2/4 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-48	Ⅺ区	不規則形	23×19	37	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-49	Ⅺ区	円形	(14)×13	13	1	10YR2/4 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	
Pt-50	Ⅺ区	不規則形	17×14	13	1	10YR2/3 明褐色	粘土質シルト	褐色粘土を基盤とする。	

表2 ピット観察表

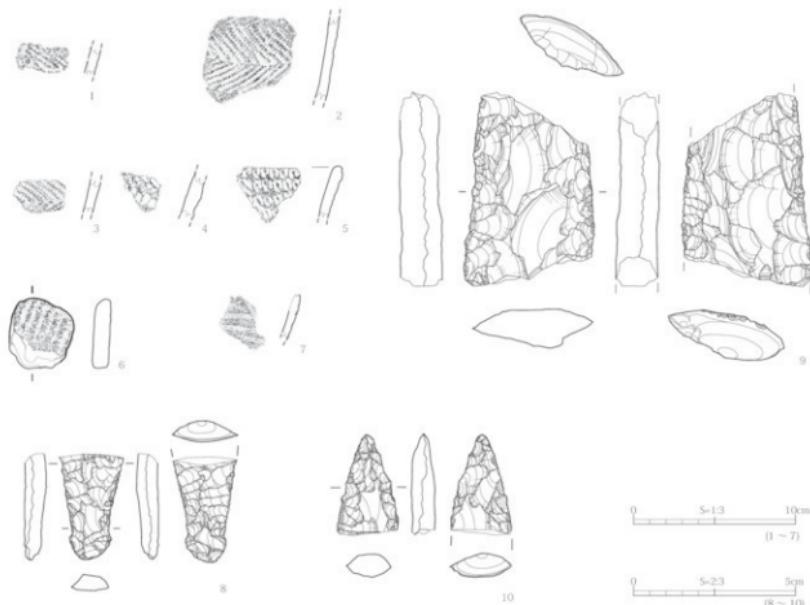
(5) 遺構出土遺物

今回の調査では表土や攢乱から多くの遺物が出土している。図化したのは須恵器2点、丸瓦2点、平瓦5点、繩文土器6点、土製円盤1点、弥生土器1点、石器3点である。F-3 (第24図-3)の丸瓦の凸面はヘラナデ調整、凹面には糸切り痕跡と布目痕がある。布目痕は細かい織目である。F-4 (第24図-4)は有段丸瓦の玉縁部分である。凸面はヘラナデ調整、凹面は布目痕は細かい織目である。G-10(第24図-7)の平瓦の凸面は斜め方向の格子叩き後にナデ調整が施されている。凹面は縱方向のナデ調整が施されている。凸面は粘土切り離しの糸切り痕跡がある。K-7～9 (第25図-8)は尖頭器である。基部には丸みを帯びた突出部が作出されている。表面、裏面とも二次加工が入念に施されている。K-8(第25図-9)は尖頭器と考えられるが、先端部と基部を欠損しており、全体の形状は不明である。二次加工が全面的に施されている。K-9(第25図-10)は先端部のみが残存している尖頭器である。



No.	登録 番号	出土地区・ 出土場所	種別	断面	法量 (cm)			調整	特徴・備考	写真 番号
					横	幅	厚			
1	E-3	出土遺物	陶土	丸瓦	(15.7)	(9.7)	(2.0)	【凸面】ナデ【凹面】系切妻・布目面	自然端	5-9
2	E-6	出土遺物	陶土	丸瓦	(7.1)	(9.8)	(1.6)	【凸面】ナデ【凹面】布目端	自然端	6-9
3	G-3	V区 遺風	丸瓦	(15.7)	(15.7)	(2.2)	【凸面】格子半葉目→ナデ【凹面】布目端→ナデ	自然端	6-11	
4	G-4	V区 遺風	丸瓦	(7.1)	(12.8)	(2.0)	【凸面】ナデ【凹面】布目端	自然端	6-12	
5	G-7	V区 遺風	平瓦	(19.5)	(15.7)	(2.2)	【凸面】格子半葉目→ナデ【凹面】布目端→ナデ	自然端	6-13	
6	G-8	V区 遺風	平瓦	(10.2)	(12.8)	(2.3)	【凸面】ナデ【凹面】布目端	自然端	6-14	
7	G-10	V区 遺風	平瓦	(12.7)	(8.3)	(2.4)	【凸面】格子半葉目→【凹面】布目端→ナデ【ヘラケ文】	自然端	6-15	
8	G-11	V区 遺風	平瓦	(5.2)	(7.1)	(2.2)	【凸面】ナデ【凹面】布目端	自然端	6-16	
9	G-12	V区 遺風	平瓦	(10.2)	(10.8)	(2.5)	【凸面】平行条目【凹面】布目端	自然端	6-16	

第24図 遺構外出土遺物（1）



No.	登録 番号	出土地 区・ 名	種別	器種	部位	法量(cm)			文様・調査	特徴・備考	写真 No.
						口径	底径	高さ			
1	A-4-1	Ⅳ区 S-D-2	縫文土器	深鉢	側面	—	—	(1.8)	縫文(外縁)	縫文土器	6-17
2	A-4-2	Ⅳ区 PD-2	縫文土器	深鉢	側面	—	—	(2.0)	【外縁】結束部縫文、【内面】三刀手	縫文土器	6-18
3	A-4-3	Ⅳ区 PD-2	縫文土器	深鉢	側面	—	(2.1)	【外縁】结束縫文、【内面】え刃手	縫文土器	6-19	
4	A-4-4	Ⅳ区 PD-2	縫文土器	深鉢	側面	—	(3.1)	ループ文	縫文土器	6-20	
5	A-4-5	Ⅳ区 表土	縫文土器	深鉢	口縁部	—	(3.3)	ループ文	縫文土器	6-21	
7	B-1	I区 植貝	壳生土器	鉢?	口縁部	—	(2.9)	浅縫			6-22

No.	登録 番号	出土地 区・ 名	種別	器種	部位	法量(cm)			石材	特徴・備考	写真 No.
						長	幅	厚			
6	P-1	V区直横縫	土製品	土製円盤	4.3	4.0	1.0			縫文(全体不規)、縫隙混入	6-23
8	K-7	IV区 SD-2	石器	尖頭器	(3.3)	(2.0)	0.6	3.9	目貫直肩	先端部欠損	6-24
9	K-8	Ⅳ区 PD-2	石器	尖頭器	(6.0)	4.0	1.3	35.3	段柄	先端部・基部欠損	6-25
10	K-9	Ⅳ区 直横縫	石器	尖頭器	(3.1)	1.9	0.7	4.2	直柄	基部欠損	6-26

第25図 遺構外出土物(2)

第4章　まとめ

国道4号仙台バイパス拡幅工事に伴う燕沢遺跡第14次発掘調査では、縄文時代前期の竪穴住居跡と土坑、9世紀後半から10世紀中頃の竪穴住居跡と溝跡などが検出された。燕沢遺跡内では初めての縄文時代の遺構の確認であった。

第1節　縄文時代

(1) SI1 竪穴住居跡

今回の調査ではII区の南斜面上で竪穴住居跡を1軒検出した。燕沢遺跡内では第2次調査と第3次調査で遺構確認面や擾乱から縄文時代前期の土器と石器が出土しているが、本遺跡周辺の七北田川流域では縄文時代の遺構の検出は初めてである。

SI1 竪穴住居跡は、削平を受けているため残存状況が良好ではないが、堆積土の一部と、かとを考えられる焼土範囲、住居跡の外周に壁外柱穴と考えられるピットが確認された。住居跡の平面形は不整円形である。住居跡の堆積土中と焼土中から胎土に繊維が含まれる土器が出土している。出土した土器は小破片のみであるが、文様の特徴と胎土に繊維が混入していることから縄文時代前期前葉の時期に相当すると考えられる。

宮城県内では、仙台市三神峯遺跡（仙台市教育委員会 1980）、名取市今熊野遺跡（宮城県教育委員会 1986）、名取市泉遺跡（名取市教育委員会 1998）で縄文時代前期前葉の竪穴住居跡の検出例がある。これらの遺跡で検出された竪穴住居跡は方形もしくは長方形を基調とし、一辺が4m以下の規模が小さいものが多いが、今熊野遺跡と泉遺跡では不整円形の小型の住居も検出されている。住居の構造の面では、一边に円形状の張り出し部を有したり、壁柱穴を有したり、あるいは地床柱を有するという特徴がある。また、三神峯遺跡で確認された第3号住居跡では住居跡の外周に小ピットが連続して確認されており、報告書では住居の壁外柱穴の可能性が指摘されている。

今回の調査で確認されたSI1 竪穴住居跡は、3.5m×3.0mの小型の住居で、壁外柱穴を有しており、これまで宮城県内で検出された縄文時代前期前葉の住居跡と共通している点もある。

(2) 出土遺物

【縄文土器】

今回の調査ではSI1 竪穴住居跡とSK6、SK8、SK9、SK10 土坑から縄文土器が出土している。全て破片資料で、全体の器形がわかる土器はない。口縁部の形態は平口縁と波状口縁のものが確認されている。

図化した土器は42点あり、全て胎土中に繊維を含んでいる。地文以外の文様はA-6(第18図-1)の底面にある竹管による連続刺突文とA-3の内面にある沈線文である。地文の種類はループ文が12点(28.6%)で最も多く、単節縄文、多条縄文、羽状縄文、組紐文がある。撚糸文は確認されなかった。

東北地方南部の土器編年で検討すると、今回出土した土器の地文の特徴から縄文時代前期前葉の「大木I式」に相当すると考えられる。当該期の土器群は宮城県内では三神峯遺跡第2b層出土土器、今熊野遺跡第1群土器、大崎市東要害貝塚第1群土器（大崎市教育委員会 2008）がある。

【石器】

石器は石礫、尖頭器、石匙、磨石が出土している。今回の調査では石核や剥片、チップの出土がないことから、燕沢遺跡では製品が遺跡内に持ち込まれた可能性が考えられる。特徴的な石器にK-7(第25図-8)の尖頭器がある。

この石器は両面加工の尖頭器で、基礎部には丸みを帯びた突出部が作出されている。この尖頭器と同じ形状の基部を有する尖頭器は、宮城県内では三神峯遺跡(第28図-3、第29-1)や今熊野遺跡(第112図-106)、泉遺跡(第68図-7)、東要害貝塚(尖頭器II類)で、縄文時代前期前葉の時期の土器群と一緒に出土している。

第2節 古代

(1)SI2 穫穴住居跡

II区の北西部で竪穴住居跡を1軒検出した。平面形は方形で、規模は375cm×330cm。南西壁にカマドがある。SI2 穫穴住居跡からはロクロ土師器と赤焼土器、須恵器、平瓦が出土した。このうちロクロ土師器は全て壊で、床面とカマド堆積土から出土している。内面にはヘラミガキ後に黒色処理が施されており、底部の切り離しは回転系切である。口唇部が外傾するものと外反するものがある。底径と口径の比は0.31～0.37である。赤焼土器は壊2点が堆積土の上層で出土している。床面とカマド内堆積土から出土したロクロ土師器の特徴から、この竪穴住居跡の時期は平安時代、9世紀後半～10世紀中頃と考えられる。

(2)SD5 溝跡（第8次調査 SD7 溝跡）

IV区の北部で、ほぼ東西方向のSD5 溝跡を検出した。この溝跡は西側に隣接する第8次調査（仙台市教育委員会1995）で確認されたSD7 溝跡と同一の溝跡である。SD7 溝跡は「主要な建物群を区画していた」溝と報告されている（以下SD7 溝跡とする）。

SD7 溝跡の南側では、溝跡と同じ方向のSB2 挖立柱建物跡が検出されており、柱穴の配置と規模から寺院の僧坊跡と推定されている。SD7 溝跡の堆積土からは灰釉陶器や赤焼土器、重弁蓮華文軒丸瓦、平瓦が出土しており、SB2 挖立柱建物跡の抜き取り穴から赤焼土器が、掘方埋土から丸瓦と平瓦が出土している。出土遺物の検討からSD7 溝跡とSB2 挖立柱建物跡は10世紀前半代に存在していたと考えられている。また、これまでの調査で瓦が出土していることから、瓦葺きの建物の存在が推定されている。さらに第2次調査で漆紙文書や陶礎が出土していることから、燕沢遺跡内には寺院または役所の機能を持つ古代の重要施設が存在していたと推測されている。

今回の調査ではSD7 溝跡の東端が確認されており、SB2 挖立柱建物跡と平行するSD7 溝跡は東側には延びないことが明らかになった。また SI2 穫穴住居跡のほかにピットが多数確認されているが、建物を構成するような柱穴の配置は認められなかった。したがって主要な建物群は今回の調査区より西側の範囲を中心に展開されていたと推測される。またSD7 溝跡とSB2 挖立柱建物跡とほぼ同じ方向の溝跡が第12次調査で検出されている（SD1 溝跡）。堆積土中からロクロ土師器や瓦が出土していることから平安時代の溝跡と考えられ、建物群を区画する溝跡の可能性が指摘されている。これらの遺構の検出状況から、施設の中心区域は溝で区画され、その規模は南北約84mと推定される。

(3)出土瓦

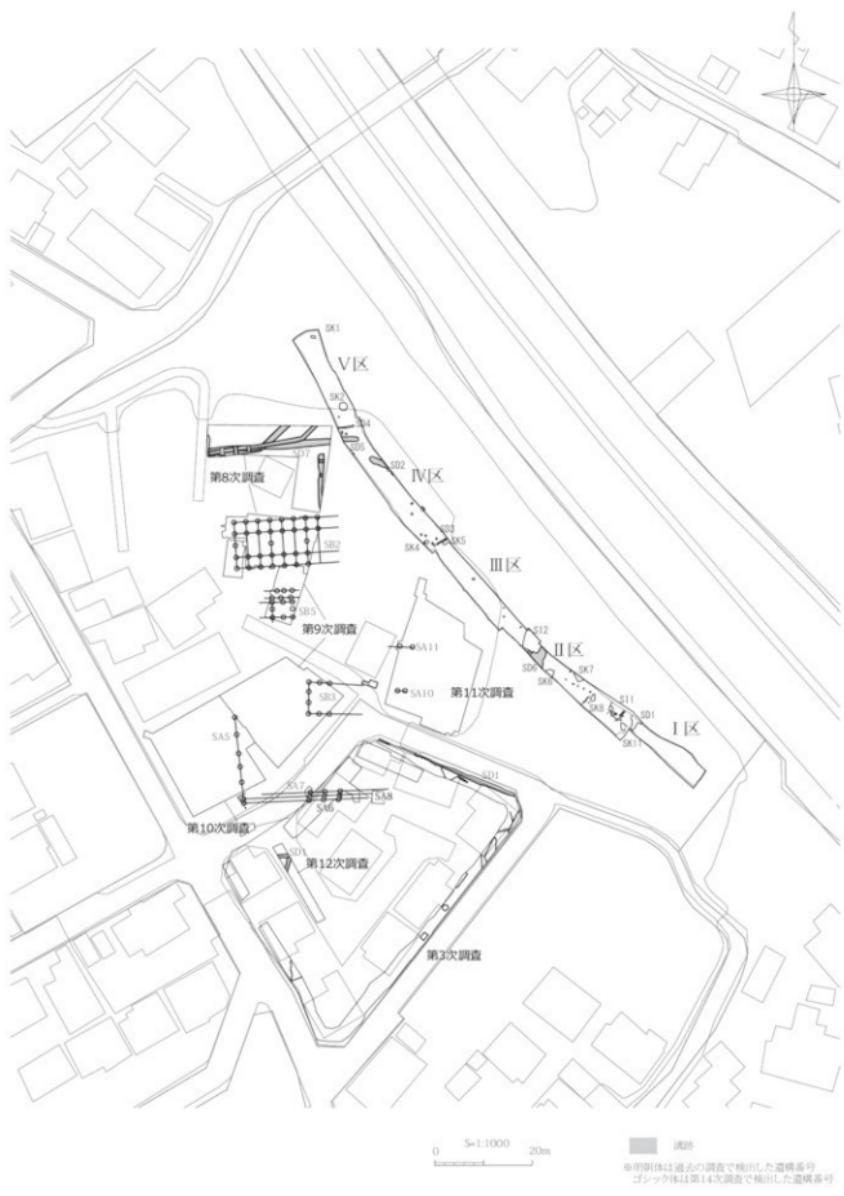
今回の調査で出土した瓦には軒平瓦と丸瓦、平瓦がある。軒平瓦はロクロ挽き重孤文軒平瓦（G-4）と均整唐草文軒平瓦（G-5）が出土した。丸瓦は有段丸瓦（F-4）が出土した。

これまで燕沢遺跡で出土した平瓦は凸面の調整で分類され、時期の検討が行われている。今回の調査で出土した平瓦は凸面の調整で3類に分類され、以下のようにこれまでの分類に相当すると考えられる。

- ①格子叩き目【G-6、G-7、G-10】……………「平瓦1類」
- ②平行叩き目【G-12】……………「平瓦2類」
- ③綱叩き目【G-1、G-2、G-3、G-8】………「平瓦4類」

①と②は多賀城創建期以前の時期、③は多賀城II、III期以降のものと考えられている。

燕沢遺跡では、これまで多賀城創建期以前の瓦が出土しているが、その時期に相当する遺構は検出されていない。今回の調査においても、その時期の瓦は出土したもの、遺構は検出されなかった。また、表探された単弁四弁蓮華文軒丸瓦から、多賀城創建期以前の時期の瓦葺き建物群の存在の可能性が指摘されているが、現時点ではその時期の遺構は確認されていない。多賀城創建期以前の遺構の検出と資料の増加を今後の調査に期待したい。



第26図 燕沢遺跡東部遺構配置図

引用・参考文献

- 伊東信雄 1950 「燕澤古瓦出土地」『仙台市史3 別編1』
- 大崎市教育委員会 2008 『東要害貝塚』宮城県大崎市文化財調査報告書第3集
- 加藤道男 1983 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』
- 興野義一 1984 「大木式土器について」『宮城の研究1—考古学編—』
- 佐川正敏 2015 「東北への仏教伝来と寺院造営・瓦生産」『東北の古代史3 蝦夷と城柵の時代』
- 仙台市教育委員会 1980 『仙台市富沢三神塚遺跡発掘調査報告書—東北電力送電線鉄塔移設に伴う東北部C地点緊急発掘調査—』仙台市文化財調査報告書第25集
- 仙台市教育委員会 1982 『燕沢遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第39集
- 仙台市教育委員会 1984 『燕沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第62集
- 仙台市教育委員会 1988 『燕沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第116集
- 仙台市教育委員会 1991 『燕沢遺跡第4・5・6次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第154集
- 仙台市教育委員会 1993 『大蓮寺窯跡—第2・3・4次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第168集
- 仙台市教育委員会 1994 『仙台平野の遺跡群XIII—平成5年度発掘調査報告書 燕沢遺跡第7次調査など—』仙台市文化財調査報告書第179集
- 仙台市教育委員会 1995 『仙台平野の遺跡群XIV—平成6年度発掘調査報告書 燕沢遺跡第8次調査など—』仙台市文化財調査報告書第195集
- 仙台市教育委員会 1996 『仙台平野の遺跡群XV—平成7年度発掘調査報告書 燕沢遺跡第9次調査など—』仙台市文化財調査報告書第211集
- 仙台市教育委員会 1997 『仙台平野の遺跡群XVI—平成8年度発掘調査報告書 燕沢遺跡第10次調査など—』仙台市文化財調査報告書第216集
- 仙台市教育委員会 1998 『仙台平野の遺跡群XVII—平成9年度発掘調査報告書 燕沢遺跡第11次調査—』仙台市文化財調査報告書第228集
- 仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡発掘調査報告書—総括編(1)—』仙台市文化財調査報告書第283集
- 仙台市教育委員会 2006 『前田館跡他 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第301集
- 仙台市教育委員会 2009 『三神峯遺跡—第6次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第338集
- 仙台市教育委員会 2010a 『与兵衛沼窯跡—都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第366集
- 仙台市教育委員会 2010b 『仙台平野の遺跡群XX—平成21年度発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第371集
- 名取市教育委員会 1998 『宮城県名取市泉遺跡 [宮城県警察・学校建設関係発掘調査報告書]』名取市文化財調査報告書第39集
- 早瀬亮介 2009 「前期大木式土器の変遷と地域性—編年研究の現状と課題—」『日本考古学協会2009年度山形大会研究発表資料集』
- 宮城県教育委員会 1986 『今熊野遺跡II 繩文・弥生編』宮城県文化財調査報告書第114集



II区調査区全景(南東から)



II区調査区全景(北西から)



III区調査区全景(南東から)



IV区調査区全景(北西から)



V区調査区全景(北西から)

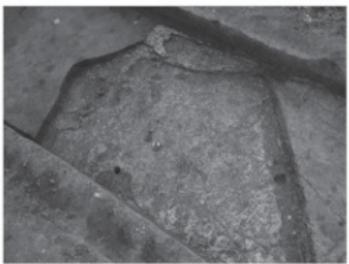
写真図版1



SI 1 竪穴住居跡確認状況 (北西から)



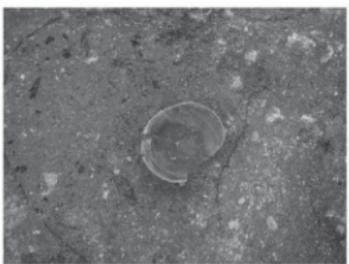
SI 1 竪穴住居跡完堀状況 (北西から)



SI 2 竪穴住居跡床面検出状況 (北から)



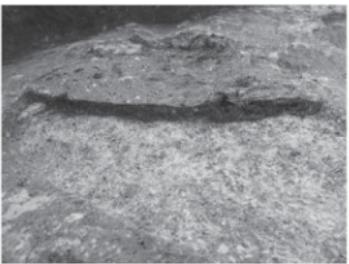
SI 2 竪穴住居跡床面検出状況 (調査区拡張後 北から)



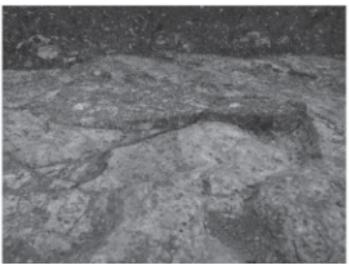
SI 2 竪穴住居跡遺物出土状況 (北から)



SI 2 竪穴住居跡遺物出土状況 (北から)

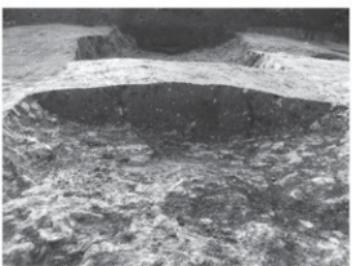


SI 2 竪穴住居跡 SK1 断面 (北東から)

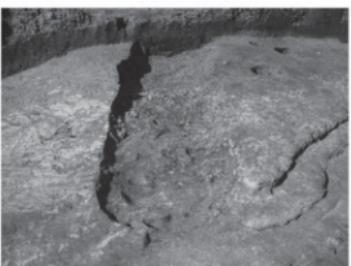


SI 2 竪穴住居跡 P1 断面 (南西から)

写真図版 2



SD 5 溝跡断面 (東から)



SD 5 溝跡完堀 (東から)



SD 6 溝跡断面 (北東から)



SK 6 土坑断面 (北東から)



SK 6 土坑完堀 (北から)



SK 9 土坑断面 (西から)

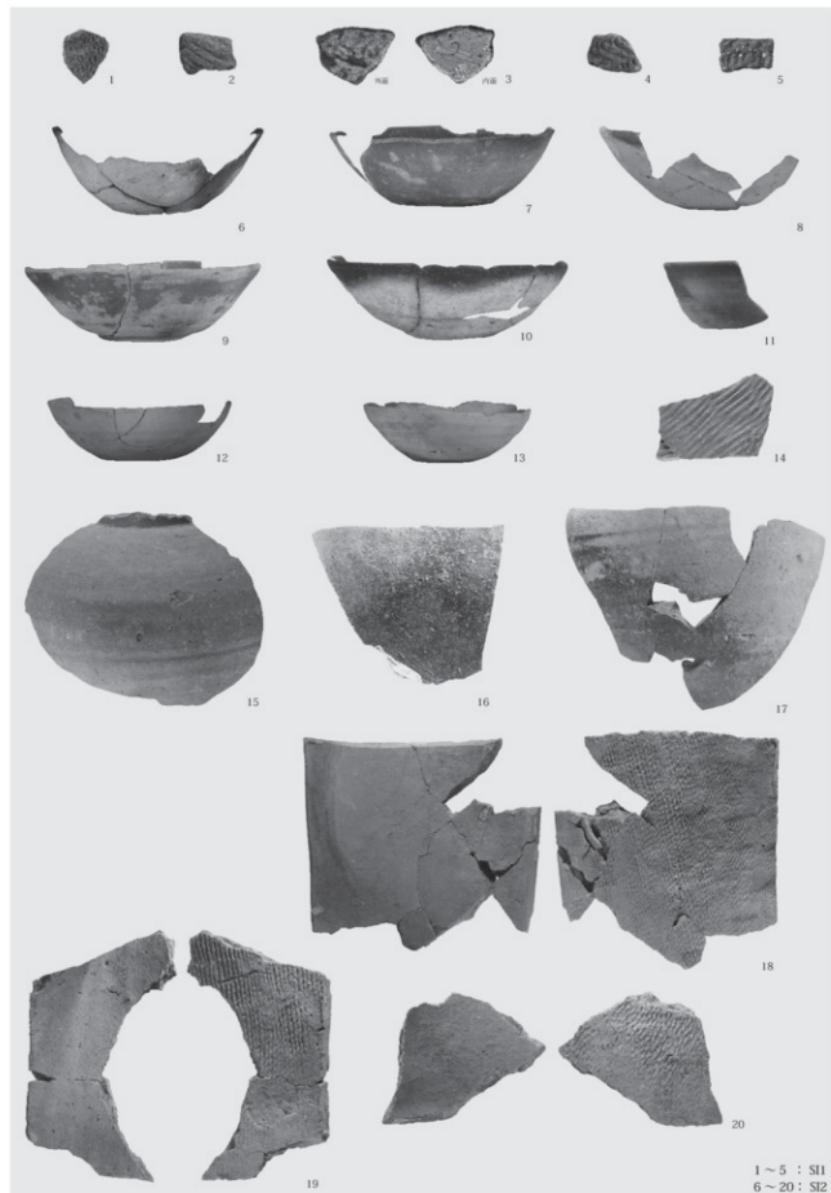


SK 10 土坑完堀 (南西から)



IV区作業風景

写真図版 3



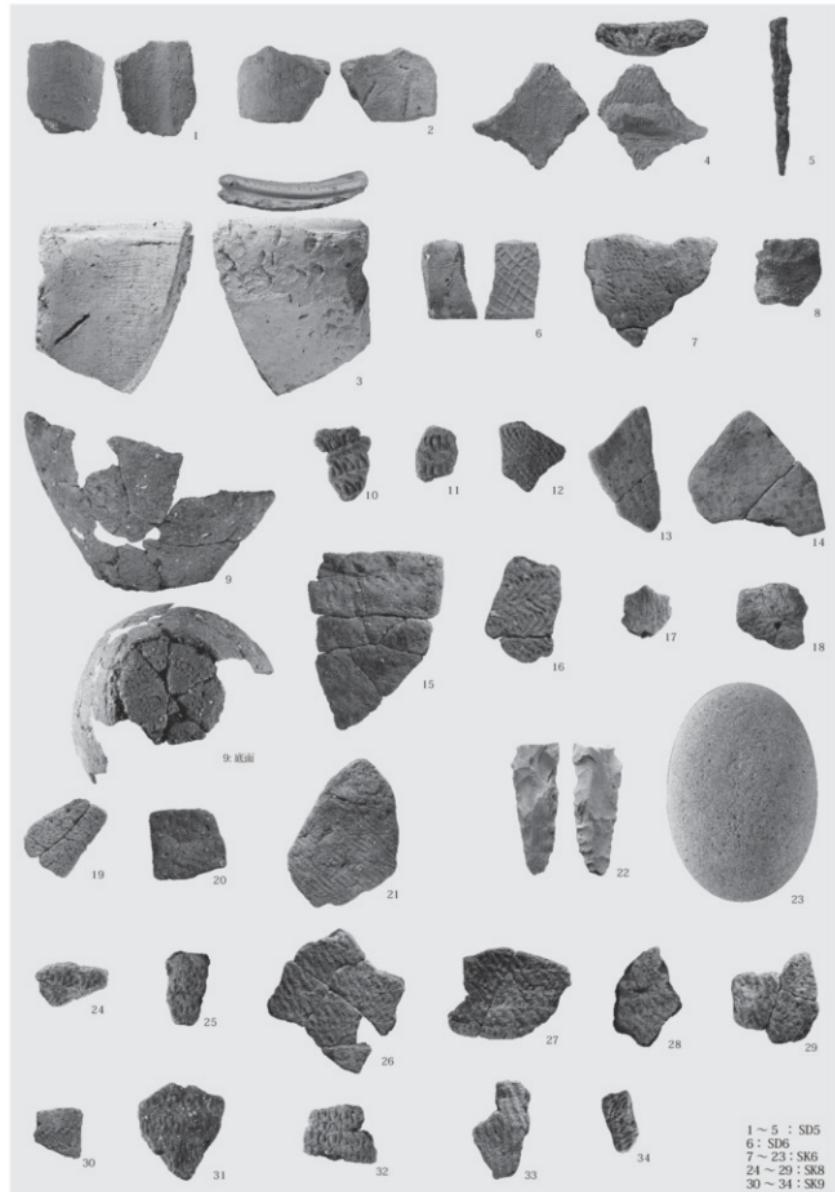
写真図版 4

1 ~ 5 : SI1

6 ~ 20 : SI2

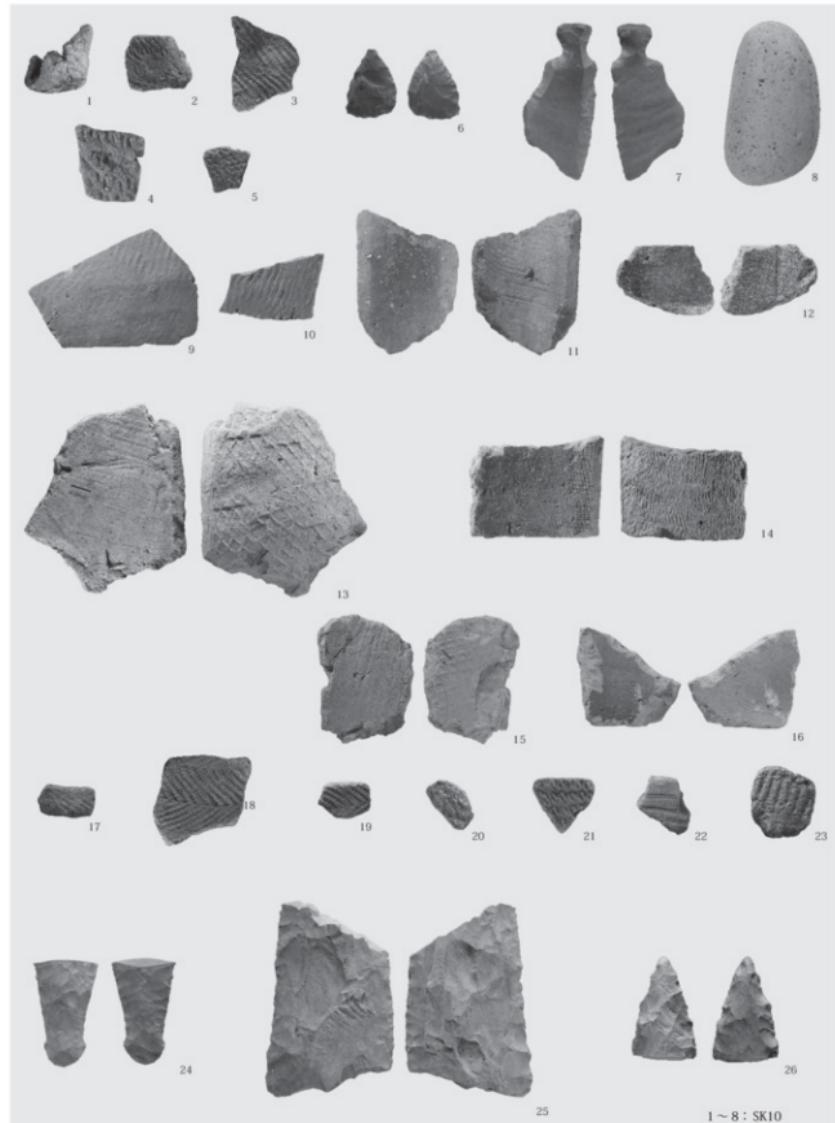
1 ~ 17 : S $\frac{1}{2}$ 1/3

18 ~ 20 : S $\frac{1}{2}$ 1/5



写真図版 5

1 ~ 4・6 : SD5
5・7 ~ 21・23 ~ 34 : SK6
22 : SK8
30 ~ 34 : SK9



写真図版 6

1 ~ 5 • 8 ~ 10 • 17 ~ 23 : S $\frac{1}{2}$ 1/3
6 • 7 • 24 ~ 26 : S $\frac{1}{2}$ 2/3
11 ~ 16 : S $\frac{1}{2}$ 1/5

1 ~ 8 : SK10

9 ~ 10 : SK10

11 ~ 16 ~ 22 : 撥乱

17 ~ 24 : SD2

18 ~ 21 ~ 25 : Ph2

23 ~ 26 : 道構確認面

報告書抄録

ふりがな	つばめさわいせきだい14じちょうさ							
書名	燕沢遺跡第14次調査							
副書名	国道4号仙台バイパス拡幅工事に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第447集							
編著者名	庄子裕美							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉1-5-12 TEL022-214-8839							
発行年月日	2016年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
燕沢遺跡 第14次	散布地・ 集落跡・ 寺院跡	調文時代 平安時代		堅穴住居跡 溝跡 土坑		調文土器・ロクロ土器・ 赤焼土器・須恵器・ 丸瓦・軒平瓦・平瓦・ 石器・金属製品		・調文時代前期の 堅穴住居跡を検出 ・平安時代の堅穴 住居跡と区画溝 を検出
要約	<p>燕沢遺跡は、台原・小田原丘陵の最東端の段丘上にあり、標高は27~30mである。</p> <p>今回の調査では、調文時代前期前葉と古代の遺構を検出した。調文時代前期前葉の遺構には堅穴住居跡と土坑があり、遺物は大木1式の調文土器が出土している。古代の遺構には堅穴住居跡と溝跡があり、遺物はロクロ土器と須恵器、瓦などが出土している。IV区で検出した溝跡は第8次調査で確認された溝跡の延長部分で、今回の調査ではこの溝跡の東端部が確認された。建物群を区画していたと考えられる。</p>							

仙台市文化財調査報告書第447集

燕沢遺跡第14次調査

—国道4号バイパス拡幅工事に伴う発掘調査報告書—

2016年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区上杉1-5-12

文化財課 022(214)8839

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24

022(263)1166

